

大阪府南河内郡美原町所在

た い
太 井 遺 跡

—— 近畿自動車道松原さみ線および
府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書 ——

本 文 編

1996. 3.

大 阪 府 教 育 委 員 会
(財)大阪府文化財調査研究センター

大阪府南河内郡美原町所在

た い
太 井 遺 跡

—— 近畿自動車道松原さみ線および
府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書 ——

本 文 編

1996. 3.

大 阪 府 教 育 委 員 会
(助)大阪府文化財調査研究センター



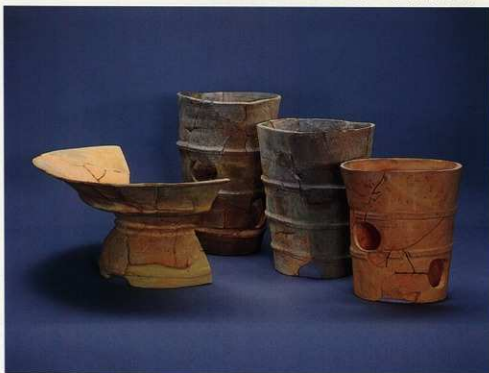
1. さば山古墳と黒姫山古墳（東から）



2. さば山古墳周溝遺物出土状況（南から）



3. H地区2号墳（東から）



4. さば山古墳出土埴輪



5. H地区全景（北東から）



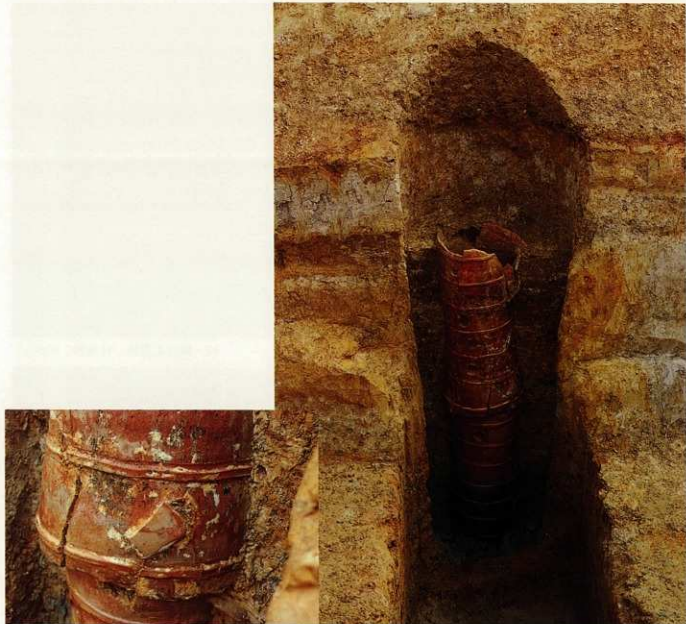
6. ピットH-69（建物H-3）



7. 建物H-3・H-4（南から）

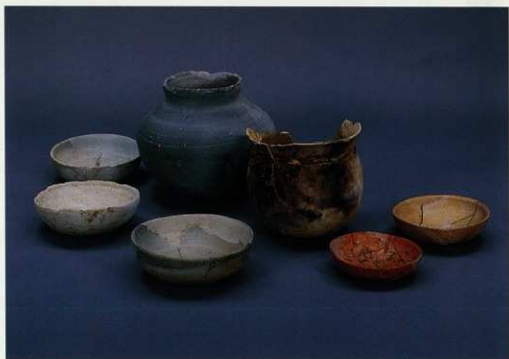


8. 統一新羅印花文陶器
（溝H-53）



9. 井戸H-10 3・4段目埴輪

10. 井戸H-10下半部



11. 井戸H-10出土土器



13. 鑄造工房 H-3 (北から)



12. 鑄造工房群 (H地区：東から)



14. 焼土土坑 H-2



15. 焼土土坑 H-1



16. 鑄造工房 H-3 南半部遺物出土状況 (北から)

17. 鑄造工房 H-3 出土埴埴 (トリペ)



序 文

府道松原泉大津線と近畿自動車道松原海南線の建設に先立つ発掘調査は、昭和59年の美原町真福寺遺跡の調査から開始され、平成2年度の堺市小阪遺跡の調査で終了いたしました。

その結果、各時代の様々な遺構や遺物が出土し、重要なデータも蓄積されてきました。その一部は、調査終了後に速報として概要報告書を刊行し、公開してきました。その後、幸いにも関係諸機関の協力を得て、平成元年度から整理作業を開始することとなり、小阪遺跡・日置荘遺跡に続いて平成6年度から1カ年の予定で整理作業を進めて参りました。本書はその整理作業の事業報告書であります。

太井遺跡は美原町に所在する遺跡であり、近隣の遺跡とともに「河内鋳物師」の本拠として歴史上、非常に重要な位置を占めています。調査の結果、奈良時代にさかのぼる鋳造工房が検出されるとともに、平安時代の鉄生産に関わる遺構や遺物が検出されています。いわゆる「河内鋳物師」のルーツとその活動拠点を具体的に知ることのできる非常に重要な成果をあげるに至っています。

ここに成果を皆様にし、調査を担当した(財)大阪府文化財調査研究センター、日本道路公団、本府土木部、風土木事務所などの関係各位の協力に対し、記して感謝の意を表するとともに、これからも文化財保護行政への御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 田 中 宏

序 文

太井遺跡は、美原町の黒山から太井に所在する遺跡である。当遺跡は東に真福寺遺跡、西に日置荘遺跡が展開する。前者の調査では梵鐘を鋳造したと考えられる遺構が検出され、鍋などの鋳型も多数出土している。一方の日置荘遺跡においても鋳造関係の遺構や遺物が出土している。

当地周辺は「河内鋳物師」が本拠として活動していた地域である。しかしながら、近年に至るまで本格的な考古学的調査が行われることは少なく、その実態については長らく文献や現存する梵鐘に刻まれた銘文などから推測するのみであった。

しかしながら、近畿自動車道松原さみ線並びに府道松原泉大津線建設に伴う調査では南河内の台地上を縦断するように路線が設定されたこともあり、その調査では冒頭でも記したように非常に多くの調査成果をあげるに至っている。とくに、各遺跡ともに鋳造関連の遺構・遺物が検出され、当地がやはり「河内鋳物師」の活動拠点であったことを示すとともに、年代や生産品の特定などの具体相も明らかになりつつある。なお、今回の太井遺跡の調査では奈良時代の鋳造工房が確認され、これがそのまま「河内鋳物師」の初源といえるかは別問題として、当地における鋳造の歴史が奈良時代にまでさかのぼることを示した点では非常に重要な資料を提供するものとなった。

これもひとえに大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団をはじめとする関係各位のご指導・ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成8年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井 清足

例 言

1. 本書は、近畿自動車道松原さみ線並びに都市計画道路松原泉大津線建設工事に伴う太井遺跡（たいいせき）の発掘調査報告書である。なお、太井遺跡は大府南河内郡美原町黒山から太井にかけて所在する。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理作業は、大阪府教育委員会および財団法人大阪文化財調査研究センター（調査・整理時は財団法人大阪文化財センター）が日本道路公団大阪建設局および大阪府鳳土木事務所の委託をうけて実施した。
3. 総括的な整理作業は1994年4月1日から1995年3月31日の1年間に実施し、印刷については1995年度に行った。
4. 整理作業および本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センター（大阪府文化財調査研究センター）が実施した。本書作成作業は調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視の指示の下、調査第3係主任技師森屋美佐子・技師江浦 洋が内業整理、主任技師平井貞子・技師立花正治が写真を担当した。
5. 発掘調査は1986年4月1日から1991年3月31日にわたって実施し、これまでに5冊の概要報告書を刊行している。
6. 発掘調査は旧センター（財団法人 大阪文化財センター）体制下で実施しており、当時の担当者は以下の通りである。なお、各年度ごとの調査区および担当者については各調査区の報告の冒頭に一覧表を付しているのので、詳細はそちらを参照されたい。

調査課長 中西靖人

調査課調査第3係長 国乗和雄

技師 石神幸子（遺物整理）・市本芳三・入江正則・江浦 洋・片山彰一（写真）・金光正裕
鋤柄俊夫・杉本二郎・寺川史郎・中村淳熾・松山 聡・村上年生・森屋美佐子（遺物整理）・山上 弘

7. 自然科学的調査については調査の過程および整理作業の過程で、以下に記した方々に依頼し、一部分析結果の遅れるものを除いて報告原稿を賜っている。記して感謝の意を表する次第である。

胎土分析

清畑 朗・伊藤憲男（大阪府立大学先端科学研究所）

井上 巖（㈱第四紀地質研究所）

バリノ・サーヴェイ株式会社

C-14年代測定

山田 治（京都産業大学）

金属分析

大澤正己（たたら研究会）

花粉・珪藻・P.O分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

8. 発掘調査および遺物整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

安里 進・阿部幸一・石神 怡・石田 修・泉谷博幸・泉本和秀・泉森 皎・井藤 徹

伊藤雅文・一瀬和夫・岩瀬 透・岩本次郎・植野浩三・上原真人・内本勝彦・大谷治孝
大船孝弘・尾谷雅彦・尾上 実・笠井敏光・堅田 直・勝田邦夫・鐘方正樹・川越俊一
川西宏幸・河音能平・河原純之・上林史郎・北野耕平・工楽善通・河本 清・小島成元
小林義孝・狭川真一・佐久間豊・桜井忠彦・桜井久之・芝野圭之助・白神典之・杉山秀宏
鈴木秀典・瀬川 健・園井正隆・高野 学・高橋美久二・竹原伸次・巽淳一郎・立石堅志
田中和弘・玉井 功・辻本 勇・續伸一郎・寺沢 薫・中井貞夫・中西克宏・永島禪臣慎
中辻 亘・西口寿生・西村 康・野上丈助・野田芳正・野藤一也・橋本久和・服部実喜
浜田延充・原田昌則・林野全孝・林部 均・原口正三・樋口吉文・広瀬和雄・藤澤一夫
藤永正明・庖丁道明・堀江門也・前川浩一・松井 章・松藤和人・松村恵司・松村隆文
水野正好・宮崎光明・宮崎康雄・宮本長二郎・百瀬正恒・森 浩一・森下恵介・森田克行
森村健一・葉師寺崇・山口直樹・山崎信二・山田邦和・山仲 進・山中敏史

9. 発掘調査および遺物整理作業の過程では以下の方々を中心として参加、協力を得た(順不同)。
速水紀孝・藤田修司・和田 衛・上野あけみ・北川和美・呉屋礼美子・杉原亜希子・高木直樹・武村千津子・田部井仁・小川雅人・藪嶋文子・善端 直・後藤信義・池田裕英・表原隆文・杉山良一・入野博司・大川真樹夫・田中千賀・比嘉道代・矢吹有里子・榎本龍也・前田晴美・十万克美・鈴木淳子・田村明子・長谷川喜也・辻孝夫・杉本祐子・斉藤慎子・清水裕美子・辻かおり・辻田美智子・山西徳美・落合敏己・岩城潔子・小見山美保・脇谷安紀子・由本雅美・山田哲之・風早伸亮・森 有希・辻 孝夫・出来英美子・林 章浩・福島規織・福島淳太・二宮大光・松阪 弘・吉田誠司・岩田 康・川道靖子・亀田由美子・浅川永子・石垣有子・岡垣内美保・稲岡知美・上河善子・川田嘉代子・長尾 恵・中筋英子・中村慎子・林 一步・福田優子・松村より子・宮武府子・山本麻里
10. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 太井遺跡の略称は、TAIである。
2. 遺構図は建物を1/100に統一したほか、各図版のスケールに縮尺率を明示している。
3. 遺構および断面図中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。
4. 遺跡発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第Ⅵ座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を基準としている。また、座標の記載はすべてm単位とする。
5. 調査区ごとの地区設定は、基本的に概要報告と対応しており、東から順にアルファベット順に表記している。本報告と調査時の対応関係は以下の通りである。

調査区	調査時・概要報告時名称	地区名
I調査区	太井遺跡（その1・その1-2）	A～E地区
II調査区	太井遺跡（その2・その2-2・その4 その4-2・その4-3）	F～I地区
III調査区	太井遺跡（その3・その3-2）	J～K地区

6. 本報告書では、I～III調査区の調査成果を個別に報告することを前提としている。また、各調査区の調査成果については時代順に記述している。調査範囲が広域にわたることから検出された遺構・遺物の年代や性格も調査区ごとに多様であり、したがって、各調査区における時代の設定および記述についても、その個性に応じて若干の相違を生じている。
7. 本報告書では、目次に示したように、本文は序を含めて6部構成となっている。本文中の挿図および写真図版の番号は、全体を通しての通し番号としてはいない。本文第I部～第III部の基礎報告では「図I-1」というようにローマ字を冠して表記している。これは写真図版についても同様であり、I調査区の写真図版の場合、「写I-1」というように表記している。また、序の部分では「序-図1」という表記方法をとっている。なお、各部内では「図1」など、省略して表記する部分もある。
8. 遺構名称および遺構番号は、調査時・概報時とは異なり、各地区ごとに地区名のアルファベットを冠した番号で表記している。本来であれば通し番号を付与すべきところであるが、新遺構名称付与による無用の混乱をさけるために基本的に調査時および概報時に付した遺構番号をできる限り踏襲し、それに地区名のアルファベットを付与する方法をとっている。
9. 遺構平面図における断面位置は「L」形によって表現している。
10. 挿図および写真図版における遺物番号は各挿図内で完結する番号を付与している。挿図の番号には上記の7で示した方法をとっており、したがって、I調査区の5番目の挿図である土器実測図中の1番の土器を示す場合には「図I-5-1」という表記方法をとっている。ただ、

本文中あるいは付表等で調査区が明記されているなどの前提条件がある場合などは、適宜に冒頭部分を省略して「1-1」あるいは「1」のみで表記している場合もある。

11. 遺物実測図の縮尺は石器が2/3、土器が1/4、埴輪が1/6および1/8を基本としている。ただ、一部の遺物では必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、各スケールに明示しているので、そちらを参照されたい。また、遺物では須恵器・陶器の断面は黒塗りにし、土師器・陶磁器類は断面白抜き、瓦はスクリーントーンで表現している。
12. 引用文献および参考文献がある場合、各章の末尾に記している。
13. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修に準拠した。
14. 本書の編集は江浦が行った。

巻 頭 目 次

巻頭カラー写真

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. さば山古墳と黒姫山古墳 | 10. 井戸H-10 下半部 |
| 2. さば山古墳周溝遺物出土状況 | 11. 井戸H-10 出土土器 |
| 3. H地区2号墳 | 12. 鋳造工房群 |
| 4. さば山古墳出土埴輪 | 13. 鋳造工房H-3 |
| 5. H地区全景 | 14. 焼土土坑H-2 |
| 6. ピットH-69(建物H-3) | 15. 焼土土坑H-1 |
| 7. 建物H-3・4 | 16. 鋳造工房H-3 南半部遺物出土状況 |
| 8. 統一新羅印花文陶器 | 17. 鋳造工房H-3 出土埴輪 (トリペ) |
| 9. 井戸H-10 3・4段目埴輪 | |

序 文
序 文
例 言
凡 例

大阪府教育委員会
(財)大阪府文化財調査研究センター

本文目次

序 調査の概要と遺跡の立地

第1章 調査の概要と前提	(赤木) 1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の方法	3
第2章 位置と環境	(江浦) 5
第1節 位置と地形環境	5
第2節 歴史的環境	6

第I部 I 調査区の調査成果

第1章 調査の概要と前提	(遺物:森屋・遺構:江浦) 13	
第1節 位置と地形環境	13	
1. 位置	2. 地形環境	
第2節 調査方法	14	
1. トレンチの設定	2. 調査の経過	
3. 調査の方法		
第3節 調査成果の概要	16	
1. 基本層序	2. 遺構・遺物の概要	
第2章 弥生時代以前の遺構・遺物	20	
第1節 旧石器時代の遺物	20	
1. 石器		
第2節 縄紋時代の遺物	20	
1. 石器		
第3節 弥生時代の遺物	20	
1. 石器	2. 土器	
第3章 古墳時代の遺構・遺物	21	
第1節 D・E地区の遺構と遺物	21	
1. 古墳		
第4章 古代の遺構・遺物	31	
第1節 A・B・C地区の遺構と遺物	31	
1. 谷	2. 溝	3. 土坑
第2節 D地区の遺構と遺物	37	
1. 溝		
第3節 E地区の遺構と遺物	39	
1. 溝	2. 落込	3. 轆状遺構
第5章 中世の遺構・遺物	41	
第1節 C・D地区の遺構と遺物	41	
1. 竪立柱建物	2. 溝	3. 井戸
4. 土坑	5. 落込	

第2節 B地区の遺構と遺物	65
1. 溝	
2. 土坑	
3. 包含層出土遺物	
第6章 近世の遺構・遺物	76
第1節 B地区の遺構と遺物	76
1. 井戸	
2. 土坑	
3. 包含層出土の遺物	
第2節 D地区の遺構と遺物	78
1. 井戸	
第7章 まとめ	79

第Ⅱ部 Ⅱ調査区の調査成果

第1章 調査の概要と前提	(江浦) 81
第1節 位置と地形環境	81
1. 位置	
2. 地形環境	
第2節 調査方法	82
1. トレンチの設定	
2. 調査の経過	
3. 調査の方法	
第3節 調査成果の概要	84
1. 基本層序	
2. 遺構・遺物の概要	
第2章 弥生時代以前の遺構・遺物	88
第1節 旧石器～縄紋時代の遺物	88
1. 石器	
第2節 弥生時代の遺物	89
1. 石器	
2. 土器	
第3章 古墳時代の遺構・遺物	90
第1節 H地区の遺構と遺物	91
1. 古墳	
第2節 I地区の遺構と遺物	98
1. 自然流路	
第4章 飛鳥・奈良時代の遺構・遺物	99
第1節 F地区の遺構と遺物	100
1. 掘立柱建物	
2. 自然流路	
第2節 G地区の遺構と遺物	101
1. 掘立柱建物	
2. 溝	
3. 土坑	
4. 井戸	
第3節 H地区の遺構と遺物	107
1. 掘立柱建物	
2. 溝	
3. 溝	
4. 井戸	
5. 土坑	
6. ビット	
7. 鋳造工房	
8. 包含層出土の遺物	
第4節 I地区の遺構と遺物	154
1. 掘立柱建物	
2. 溝	
3. 溝	
4. 井戸	

5. 土坑	6. 包含層出土の遺物	
第5章 平安時代以降の遺構・遺物		158
第1節 G・I地区の遺構と遺物		158
1. 掘立柱建物	2. 炉壁集積	
3. 自然流路	4. 掩体	
第6章 まとめ		160

第Ⅲ部 Ⅲ調査区の調査成果

第1章 調査の概要と前提	(江浦)	161
第1節 位置と地形環境		161
1. 位置	2. 地形環境	
第2節 調査方法		162
1. トレンチの設定	2. 調査の経過	
3. 調査の方法		
第3節 調査成果の概要		164
1. 基本層序	2. 遺構・遺物の概要	
第2章 旧石器時代以前の遺構・遺物		167
第1節 概要と前提		167
第2節 J地区の石器包含層と石器		168
1. 第1地点	2. 第2地点	
3. その他の石器		
第3章 縄紋・弥生時代の遺構・遺物		180
第1節 J地区の遺構と遺物		180
1. 自然流路	2. 包含層出土の石器	
第4章 古墳時代の遺構・遺物		185
第1節 J地区の遺構と遺物		186
1. ビット	2. 自然流路	
第5章 奈良・平安時代の遺構・遺物		190
第1節 奈良時代の遺構と遺物		190
1. 溝		
第2節 平安時代の遺構と遺物		192
1. 掘立柱建物	2. 溝	
3. 土坑	4. 土器埋納ビット	
5. 炉壁集中部	6. 自然流路	
第6章 中・近世の遺構・遺物		199
第1節 J地区の遺構・遺物		199
1. 溝	2. 畦畔状遺構	3. 飲溝群
4. 自然流路	5. 井戸	6. 轍
7. 包含層出土の遺物		

第2節 K地区の遺構・遺物	202
1. 調査成果	
2. 出土遺物	
第7章 まとめ	203

第IV部 自然科学的調査

第1章 自然科学的調査の概要	(江浦)	205
第1節 自然科学的調査の経過		205
第2節 自然科学的調査の概要		206
1. 環境分析	2. 金属成分分析	
3. 胎土分析	4. 年代測定	
第2章 太井遺跡Ⅱ調査区出土増埒溶融物の金属学的調査	(大澤正己)	209
第1節 概要		209
第2節 いきさつ		209
第3節 調査方法		209
1. 供試材	2. 調査方法	
第4節 調査結果と考察		210
1.TAI-1:増埒(トリベ) 附着物	2. TAI-2:増埒(トリベ) 附着物	
3.TAI-3:増埒(トリベ) 附着物	4. TAI-4:増埒(トリベ) 附着物	
5.TAI-5:増埒(トリベ) 附着物	6. TAI-6:増埒(トリベ) 附着物	
7.TAI-7:増埒(トリベ) 附着物	8. TAI-8:増埒(トリベ) 附着物	
第5節 まとめ		214
第3章 太井遺跡Ⅱ調査区出土土器の胎土分析	(清畑 朗・伊藤憲男)	241
第1節 はじめに		241
第2節 分析試料		241
第3節 分析方法		241
1. 中性子放射化分析	2. 蛍光X線分析	
第4節 分析結果		242
第5節 考察		242
1. 元素濃度の変動係数	2. 元素間の相関係数	
3. 低濃泥地産および真福寺遺跡出土の土器胎土との比較		
4. Cu・AsおよびSbの高濃度胎土について		
第6節 おわりに		245
第4章 太井遺跡出土埴輪の胎土分析	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	255
第1節 はじめに		255
第2節 試料		255
第3節 分析方法		255
第4節 観察結果		255
1. 砂屑片		
第5節 考察		261
第5章 太井遺跡Ⅱ調査区採集土壌の花粉・珪藻分析	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	289
第1節 はじめに		289
第2節 試料		289

第3節 分析方法	289	
1. 珪藻分析	2. 花粉分析	
第4節 結果の表示法	290	
1. 珪藻化石	2. 花粉化石	
第5節 微化石の産状	290	
1. 珪藻化石	2. 花粉化石	
第6節 奈良時代の井戸 (19Iトレンチ・井戸I-14)	291	
1. 埋積過程	2. 周辺植生	
第7節 江戸時代の井戸 (18Iトレンチ・土坑I-199)	291	
1. 埋積過程	2. 周辺植生	
第8節 まとめ	292	
第6章 太井遺跡Ⅱ調査区I地区流路採集土壌の花粉・珪藻分析 (バリノ・サーヴェイ株式会社)	297	
第1節 はじめに	297	
第2節 試料	297	
第3節 分析方法と結果の表示方法	297	
1. 珪藻化石	2. 花粉化石	3. 植物珪酸体分析
第4節 微化石の産状	299	
1. 珪藻化石	2. 花粉化石	3. 植物珪酸体
第5節 珪藻化石からみた水域環境	303	
1. 第1地点	2. 第2地点	3. 第3地点
4. 第4地点	5. 第5地点	
第6節 花粉化石からみた古植生	306	
1. 各地点の花粉化石群集の比較	2. 森林植生	3. 低地の植生
第7節 植物珪酸体からみた周辺植生	308	
1. 周辺のイネ科植物について	2. 稲作の消長について	
第8節 低地の環境変遷	309	
第7章 太井遺跡Ⅰ調査区から出土した流木のC-14年代測定結果報告 (柴田せつ子・川野瑛子・中林武重)	351	
第1節 測定試料	351	
第2節 測定原理及び測定方法	351	
1. C-14年代測定法の原理	2. 試料の前処理	3. 木炭試料からメタノールの合成
4. 液シンによるメタノールのC-14放射能測定	5. C-14年代測定の算出	
第3節 試料の前処理	353	
第4節 木炭試料からメタノールの合成および液体シンレーションによるメタノールの放射能測定	353	
第5節 年代測定結果	353	

第Ⅴ部 総 括

第1章 調査成果の総括	(江浦) 355
第1節 古墳時代の太井遺跡	355
1. 調査成果の概要	2. 黒姫山古墳とその周辺
3. 古墳時代余録	
第2節 古代の太井遺跡	356
1. 調査成果の概要	2. Ⅱ調査区の鋳造工房とその特質

挿 図 目 次

序 調査の概要と遺跡の立地

序-図1 調査地の位置	1	序-図5 遺跡周辺地形図	7
序-図2 国土座標系とそれに伴う地区割	3	序-図6 太井遺跡周辺の遺跡分布図	8
序-図3 太井遺跡の位置	5	序-図7 太井遺跡周辺の宇図	10
序-図4 太井遺跡周辺の地形	5		

第 I 部 I 調査区の調査成果

図 I-1 I 調査区の位置	13	図 I-28 ビット D-7 出土土器	43
図 I-2 トレンチ配置図	14	図 I-29 建物 C-1 平面・断面図	43
図 I-3 地区割設定図	15	図 I-30 建物 D-1 平面・断面図	43
図 I-4 土層柱状図	18	図 I-31 溝 C-13 平面・断面図	44
図 I-5 C 地区谷部土層柱状図	18	図 I-32 C 地区溝出土土器	45
図 I-6 出土土器	20	図 I-33 井戸 C-10 平面・断面	46
図 I-7 黒姫山古墳周辺の古墳と地形	21	図 I-34 井戸・包含層出土砥石	47
図 I-8 さぼ山古墳	22	図 I-35 井戸 C-12 平面・断面図	47
図 I-9 さぼ山古墳周溝土層断面	23	図 I-36 井戸 C-13 平面・断面図	47
図 I-10 さぼ山古墳周溝内墳輪・ 暮石出土状況	24	図 I-37 C 地区井戸出土土器 (1)	49
図 I-11 さぼ山古墳周溝内出土須恵器	25	図 I-38 井戸 C-14 出土土器	50
図 I-12 さぼ山古墳周溝内出土 朝顔形埴輪	26	図 I-39 C 地区井戸出土土器 (2)	51
図 I-13 さぼ山古墳周溝内出土埴輪 (1)	27	図 I-40 C 地区井戸出土土器 (3)	52
図 I-14 さぼ山古墳周溝内出土埴輪 (2)	28	図 I-41 井戸 C-17 出土遺物	53
図 I-15 さぼ山古墳周溝内出土埴輪 (3)	29	図 I-42 井戸 C-18 平面・断面図	54
図 I-16 さぼ山古墳周溝内出土埴輪 (4)	30	図 I-43 井戸 C-18 出土漆器	54
図 I-17 検出した谷 (谷 A-1, B-1, C-1) と周辺の地形	31	図 I-44 土坑 D-7 平面・断面図	55
図 I-18 谷 (谷 A-1, B-1, C-1) 出土土器	32	図 I-45 土坑 D-7 出土土器	55
図 I-19 A 地区西半部・ B 地区東半部遺構平面図	34	図 I-46 土坑 C-87 平面・断面図	57
図 I-20 溝 B-32 平面・断面図	35	図 I-47 C 地区土坑出土土器	58
図 I-21 溝 B-32 出土延喜通宝	35	図 I-48 土坑 C-88・土坑 C-89・ 土坑 C-90 平面・断面図	59
図 I-22 C 地区中央部遺構平面図	36	図 I-49 C 地区土坑出土土器・ 土製品	60
図 I-23 土坑 C-118 出土土器	37	図 I-50 土坑 C-134 平面・断面図	62
図 I-24 D 地区東半部遺構平面図	37	図 I-51 土坑 C-134 出土土器	63
図 I-25 D 地区溝出土土器	38	図 I-52 土坑 D-30 平面・断面図	64
図 I-26 E 地区遺構平面図	40	図 I-53 落込 C-3 出土土器	64
図 I-27 C・D 地区中世遺構平面図	42	図 I-54 溝 B-101 出土土器 (1)	67
		図 I-55 溝 B-101 出土土器 (2)	68
		図 I-56 溝 B-101 出土土器 (3)	69

図 I - 57 B 地区溝出土軒丸瓦 (1)	71	図 I - 63 B 地区井戸・土坑出土土器	76
図 I - 58 B 地区溝出土軒丸瓦 (2)	72	図 I - 64 B 地区出土土製品	77
図 I - 59 B 地区溝出土軒平瓦	73	図 I - 65 井戸 D-1 出土木臼	78
図 I - 60 B 地区溝出土鰐尾・平瓦・埴	74	図 I - 66 I 調査区における 各時期の遺構分布	80
図 I - 61 B 地区土坑出土土器	75		
図 I - 62 包含層出土土器	75		

第 II 部 II 調査区の調査成果

図 II - 1 調査区的位置	81	図 II - 32 溝 H-58 平面・断面図	116
図 II - 2 トレンチ配置図	82	図 II - 33 溝 H-57 出土土器	117
図 II - 3 地区割設定図	83	図 II - 34 溝 H-58・H-60 出土土器	117
図 II - 4 土層柱状図	85	図 II - 35 溝 H-63 遺物出土分布	118
図 II - 5 石器	88	図 II - 36 溝 H-63・H-64 断面図	119
図 II - 6 縄紋・弥生土器	89	図 II - 37 溝 H-63 出土遺物 (1)	119
図 II - 7 黒姫山古墳周辺の古墳分布	90	図 II - 38 溝 H-63 出土遺物 (2) 須恵器	120
図 II - 8 1 号墳	91	図 II - 39 溝 H-63 出土遺物 (3) 土師器	121
図 II - 9 古墳時代の遺構	91	図 II - 40 溝 H-64 出土土器	122
図 II - 10 3 号墳	93	図 II - 41 溝 H-65 出土土器	122
図 II - 11 古墳出土土器	93	図 II - 42 溝 H-66 出土土器	123
図 II - 12 埴輪円筒棺 H-1	95	図 II - 43 溝 H-69・H-70 出土土器	124
図 II - 13 埴輪円筒棺 H-1 出土埴輪	96	図 II - 44 溝 H-74 平面・断面図	124
図 II - 14 流路 I-1 出土土器	98	図 II - 45 溝 H-74 出土土器	125
図 II - 15 流路 F-1 出土土器	100	図 II - 46 溝 H-77 出土土器	126
図 II - 16 G 地区遺構平面図	101	図 II - 47 溝 H-78 出土土器	127
図 II - 17 建物 G-15 平面・断面図	102	図 II - 48 H 地区遺構出土埴輪・ 韓式系土器・陶棺	127
図 II - 18 溝 G-2 出土紡錘車	103	図 II - 49 井戸 H-10 平面・断面図	129~130
図 II - 19 G 地区溝出土土器	103	図 II - 50 井戸 H-10 (最下層) 出土土器	131
図 II - 20 土坑 G-41 出土土器	104	図 II - 51 井戸 H-10 (上・中層) 出土土器	131
図 II - 21 井戸 G-12 平面・断面図	105	図 II - 52 井戸 H-10 井戸枠転用埴輪 (1)	132
図 II - 22 G 地区井戸出土土器	106	図 II - 53 井戸 H-10 井戸枠転用埴輪 (2)	133
図 II - 23 H 地区遺構平面図	107	図 II - 54 土坑 H-39 平面・断面図	135
図 II - 24 建物 H-3・H-4 平面・断面図	109	図 II - 55 土坑 H-39 出土土器	135
図 II - 25 建物 H-5・H-6・ H-7・H-8・H-11 平面・断面図	111	図 II - 56 H 地区土坑出土土器	135
図 II - 26 建物 H-9・H-10・ H-14 平面・断面図	113	図 II - 57 H 地区ビツト出土土器	135
図 II - 27 建物 H-12・H-13 平面・断面図	114	図 II - 58 鋳造工房全体図	136
図 II - 28 櫓 H-1 平面・断面図	115	図 II - 59 鋳造工房 H-1 遺物出土分布 (上)・完掘後床面 (下)	138
図 II - 29 溝 H-8 出土土器	115	図 II - 60 鋳造工房 H-1 断面図	139
図 II - 30 溝 H-53 出土土器	116	図 II - 61 鋳造工房 H-2 平面・断面図	140
図 II - 31 H 地区溝・井戸出土瓦	116	図 II - 62 鋳造工房 H-1・H-2 出土土器	141

図Ⅱ-63	鑄造工房H-3平面図	142
図Ⅱ-64	鑄造工房H-3断面図	143
図Ⅱ-65	鑄造工房H-3出土遺物(1)	146
図Ⅱ-66	鑄造工房H-3出土遺物(2)	147
図Ⅱ-67	鑄造工房H-3・ 溝H-74出土トリベ	149
図Ⅱ-68	鑄造工房H-3・ 溝H-66・74出土トリベ	150
図Ⅱ-69	鑄造工房・溝出土輪羽口	151
図Ⅱ-70	鑄造工房・溝出土粘土塊	152
図Ⅱ-71	鑄造工房・溝出土鉄製品	152
図Ⅱ-72	Ⅱ層出土土器	153
図Ⅱ-73	Ⅲ層出土土器	153

図Ⅱ-74	槽I-2平面・断面図	154
図Ⅱ-75	建物I-16・I-17 平面・断面図	155
図Ⅱ-76	土坑I-71平面・断面図	155
図Ⅱ-77	土坑I-110平面・断面図	156
図Ⅱ-78	I地区溝・土坑・ ピット出土土器	157
図Ⅱ-79	I地区包含層出土土帯	157
図Ⅱ-80	I地区包含層出土土器	157
図Ⅱ-81	建物G-2平面・断面図	158
図Ⅱ-82	谷・流路出土遺物	158
図Ⅱ-83	掩体I-1平面・断面図	159

第Ⅲ部 Ⅲ調査区の調査成果

図Ⅲ-1	Ⅲ調査区の位置	161
図Ⅲ-2	トレンチ配置図	162
図Ⅲ-3	地区割設定図	163
図Ⅲ-4	土層柱状図	165
図Ⅲ-5	石器包含層検出地点	167
図Ⅲ-6	第1地点・ 第2地点石器分布図	169
図Ⅲ-7	出土石器(1)	171
図Ⅲ-8	出土石器(2)	172
図Ⅲ-9	出土石器(3)	174
図Ⅲ-10	出土石器(4)	175
図Ⅲ-11	出土石器(5)	176
図Ⅲ-12	出土石器(6)	177
図Ⅲ-13	出土石器(7)	178
図Ⅲ-14	出土石器(8)	179
図Ⅲ-15	縄紋～弥生時代遺構平面図	180
図Ⅲ-16	縄紋土器出土分布	181
図Ⅲ-17	縄紋土器	182
図Ⅲ-18	出土石器	184
図Ⅲ-19	古墳時代遺構平面図	185
図Ⅲ-20	ピットJ-1・ J-2平面・断面図	186
図Ⅲ-21	ピットJ-1・J-2出土土器	186
図Ⅲ-22	自然流路J-2断面図	187

図Ⅲ-23	自然流路J-2 出土土器・埴輪	188
図Ⅲ-24	自然流路J-2出土製塩土器	189
図Ⅲ-25	自然流路J-2出土木製品	189
図Ⅲ-26	奈良・平安時代遺構平面図	190
図Ⅲ-27	溝J-9・J-12断面図	191
図Ⅲ-28	溝J-9出土土器	191
図Ⅲ-29	建物J-1・J-2平面・断面図	192
図Ⅲ-30	ピットJ-8出土土器	192
図Ⅲ-31	溝J-4出土土器	193
図Ⅲ-32	溝J-3・J-4断面図	193
図Ⅲ-33	土坑群 平面・断面図	194
図Ⅲ-34	土坑J-4出土土器	194
図Ⅲ-35	土器埋納ピットJ-76	195
図Ⅲ-36	土器埋納ピットJ-76出土土器	195
図Ⅲ-37	炉壁集中部J-1・J-3平面図	197
図Ⅲ-38	炉壁集中部J-2・J-4平面図	198
図Ⅲ-39	中・近世遺構平面図	200
図Ⅲ-40	溝J-10断面図	201
図Ⅲ-41	溝J-25断面図	201
図Ⅲ-42	溝J-25出土土器	201
図Ⅲ-43	畦畔状遺構J-1	201
図Ⅲ-44	J地区包含層出土土器	202
図Ⅲ-45	K地区包含層出土土器	203

第IV部 自然科学的調査

IV-2-図1	御蔵仕用之控書註記	217	IV-6-図11	第4地点の 主要花粉化石群集の変遷	337
IV-2-図2	桶形増場の操業想定図	217	IV-6-図12	第5地点の 主要花粉化石群集の変遷	339
IV-3-図1	分析土器	247	IV-6-図13	第1地点の 植物珪酸体組成の層位分布	341
IV-5-図1	主要珪藻化石群集の層位的分布	296	IV-6-図14	第2地点の 植物珪酸体組成の層位分布	342
IV-5-図2	花粉化石群集の層位的分布	296	IV-6-図15	第3地点の 植物珪酸体組成の層位分布	344
IV-6-図1	Iトレンチ南壁断面図 および試料採取地点	311	IV-6-図16	第4地点の 植物珪酸体組成の層位分布	345
IV-6-図2	第1地点～第5地点の 模式柱状図	312	IV-6-図17	第5地点の 植物珪酸体組成の層位分布	346
IV-6-図3	微化石分布層位	313	IV-6-図18	第1地点～ 第5地点の珪藻化石群集帯	347
IV-6-図4	第1地点の 主要珪藻化石群集の変遷	319	IV-6-図19	第1地点～ 第5地点の花粉化石群集帯	348
IV-6-図5	第2地点の 主要珪藻化石群集の変遷	321	IV-6-図20	第1地点～第5地点の 主要植物珪酸体の層位的分布	347
IV-6-図6	第3地点の 主要珪藻化石群集の変遷	325	IV-7-図1	直接法	354
IV-6-図7	第5地点の 主要珪藻化石群集の変遷	329	IV-7-図2	メタノール合成	354
IV-6-図8	第1地点の 主要花粉化石群集の変遷	331			
IV-6-図9	第2地点の 主要花粉化石群集の変遷	333			
IV-6-図10	第3地点の 主要花粉化石群集の変遷	335			

表 目 次

序 調査の概要と遺跡の立地

序 - 表 1 遺跡地名表	9
---------------------	---

第 I 部 I 調査区の調査成果

表 I - 1 I 調査区の調査一覧表	16
---------------------------	----

第 II 部 II 調査区の調査成果

表 II - 1 II 調査区の調査一覧表	84
-----------------------------	----

第 III 部 III 調査区の調査成果

表 III - 1 III 調査区の調査一覧表	164
-------------------------------	-----

第 IV 部 自然科学的調査

IV - 1 - 表 1 自然科学分析一覧表	205	IV - 3 - 表 2-2 土器胎土試料の 放射化分析結果	249
IV - 2 - 表 1 埴埴溶融附着物の定量分析値	216	IV - 3 - 表 2-2 土器胎土試料の 放射化分析結果	250
IV - 2 - 表 2 古銭分析表	216	IV - 3 - 表 3 土器胎土試料の 蛍光 X 線分析結果	251
IV - 2 - 表 3 埴埴溶融附着物 (TAI - 1) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	218	IV - 3 - 表 4 元素濃度の算術平均、標準偏差、 最小値、最大値、および変動係数	252
IV - 2 - 表 4 埴埴溶融附着物 (TAI - 2) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	219	IV - 3 - 表 5 相関係数	252
IV - 2 - 表 5 埴埴溶融附着物 (TAI - 3) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	220	IV - 3 - 表 6-1 太井遺跡出土土器胎土と低濃泥地産胎 土との組成元素の平均濃度の比較	252
IV - 2 - 表 6 埴埴溶融附着物 (TAI - 4) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	221	IV - 3 - 表 6-2 太井遺跡と真福寺遺跡出土 土器胎土との組成元素の平均濃度の比較	252
IV - 2 - 表 7 埴埴溶融附着物 (TAI - 5) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	222	IV - 3 - 表 7 胎土中の Cu, As, Sb 濃度の分類	253
IV - 2 - 表 8 埴埴溶融附着物 (TAI - 6) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	223	IV - 4 - 表 1 分析試料一覧	256
IV - 2 - 表 9 埴埴溶融附着物 (TAI - 7) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	224	IV - 4 - 表 2 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(1)	262
IV - 2 - 表 10 埴埴溶融附着物 (TAI - 8 その 1) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	225	IV - 4 - 表 3 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(2)	262
IV - 2 - 表 11 埴埴溶融附着物 (TAI - 8 その 2) の コルチナーブロウによる高速定性分析結果	226	IV - 4 - 表 4 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(3)	262
IV - 3 - 表 1 胎土分析試料一覧	246	IV - 4 - 表 5 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(4)	262
IV - 3 - 表 2-1 土器胎土試料の 放射化分析結果	248	IV - 4 - 表 6 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(5)	263
		IV - 4 - 表 7 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(6)	263
		IV - 4 - 表 8 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(7)	263
		IV - 4 - 表 9 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(8)	263
		IV - 4 - 表 10 埴埴薄片顕微鏡観察記録表(9)	264

IV-4-表11	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(10) …	264	IV-5-表3	淡水生種の各生態性に 対する適応性 ……………	294
IV-4-表12	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(11) …	264	IV-5-表4	花粉分析結果 ……………	294
IV-4-表13	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(12) …	264	IV-5-表5	珪藻分析結果 ……………	295
IV-4-表14	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(13) …	265	IV-6-表1	珪藻の生態分類 ……………	314
IV-4-表15	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(14) …	265	IV-6-表2	淡水生種の各生態性に 対する適応性 ……………	314
IV-4-表16	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(15) …	265	IV-6-表3-1	第1地点の珪藻分析結果 ……	315
IV-4-表17	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(16) …	265	IV-6-表3-2	第1地点の珪藻分析結果 ……	316
IV-4-表18	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(17) …	266	IV-6-表3-3	第1地点の珪藻分析結果 ……	317
IV-4-表19	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(18) …	266	IV-6-表3-4	第1地点の珪藻分析結果 ……	318
IV-4-表20	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(19) …	266	IV-6-表4	第2地点の珪藻分析結果 ……	320
IV-4-表21	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(20) …	266	IV-6-表5-1	第3地点の珪藻分析結果 ……	322
IV-4-表22	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(21) …	267	IV-6-表5-2	第3地点の珪藻分析結果 ……	323
IV-4-表23	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(22) …	267	IV-6-表5-3	第3地点の珪藻分析結果 ……	324
IV-4-表24	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(23) …	267	IV-6-表6	第4地点の珪藻分析結果 ……	326
IV-4-表25	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(24) …	267	IV-6-表7-1	第5地点の珪藻分析結果 ……	327
IV-4-表26	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(25) …	268	IV-6-表7-2	第5地点の珪藻分析結果 ……	328
IV-4-表27	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(26) …	268	IV-6-表8	第1地点の花粉分析結果 ……	330
IV-4-表28	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(27) …	268	IV-6-表9	第2地点の花粉分析結果 ……	332
IV-4-表29	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(28) …	268	IV-6-表10	第3地点の花粉分析結果 ……	334
IV-4-表30	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(29) …	269	IV-6-表11	第4地点の花粉分析結果 ……	336
IV-4-表31	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(30) …	269	IV-6-表12	第5地点の花粉分析結果 ……	338
IV-4-表32	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(31) …	269	IV-6-表13	第1地点の 植物珪酸体分析結果 ……	340
IV-4-表33	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(32) …	269	IV-6-表14	第2地点の 植物珪酸体分析結果 ……	342
IV-4-表34	埴輪薄片顕微鏡観察記録表(33) …	270	IV-6-表15	第3地点の 植物珪酸体分析結果 ……	343
IV-4-表35	鉱物片・岩片量比の頻度 ……	270	IV-6-表16	第4地点の 植物珪酸体分析結果 ……	345
IV-4-表36	鉱物片・岩片の最大粒径の比較 …	270	IV-6-表17	第5地点の 植物珪酸体分析結果 ……	346
IV-4-表37	鉱物片・岩片量比の頻度 ……	270			
IV-4-表38	鉱物片・岩片の最大粒径の比較 …	270			
IV-4-表39	鉱物片・岩片量比の頻度 ……	270			
IV-4-表40	鉱物片・岩片の最大粒径の比較 …	270			
IV-5-表1	分析試料表 ……………	289			
IV-5-表2	珪藻の生態分類 ……………	294			

付 表 目 次

I 調査区

付表 I - 1	I 調査区主要ピット一覧	359	付表 I - 5	I 調査区主要土坑一覧(2)	362
付表 I - 1	I 調査区主要溝一覧(1)	359	付表 I - 6	I 調査区主要井戸一覧(1)	362
付表 I - 3	I 調査区主要溝一覧(2)	360	付表 I - 7	I 調査区主要井戸一覧(2)	363
付表 I - 4	I 調査区主要土坑一覧(1)	361	付表 I - 8	I 調査区主要遺構(その他)一覧	363

II 調査区

付表 II - 1	II 調査区主要ピット一覧(1)	364	付表 II - 7	II 調査区主要土坑一覧(2)	369
付表 II - 2	II 調査区主要ピット一覧(2)	365	付表 II - 8	II 調査区主要井戸一覧	369
付表 II - 3	II 調査区主要ピット一覧(3)	366	付表 II - 9	II 調査区古墳関連遺構一覧	369
付表 II - 4	II 調査区主要ピット一覧(4)	367	付表 II - 10	II 調査区鋳造関連遺構一覧	370
付表 II - 5	II 調査区主要溝一覧	368	付表 II - 11	II 調査区主要遺構(その他)一覧	370
付表 II - 6	II 調査区主要土坑一覧(1)	368			

III 調査区

付表 III - 1	III 調査区主要ピット一覧	371	付表 III - 4	III 調査区主要井戸一覧	372
付表 III - 2	III 調査区主要溝一覧	372	付表 III - 5	III 調査区主要遺構(その他)一覧	372
付表 III - 3	III 調査区主要土坑一覧	372			

写真目次

序 調査の概要と遺跡の立地

序・写1 太井遺跡周辺航空写真	11
-----------------	----

第IV部 自然科学的調査

IV-2・写真1 埴埴(トリベ)付着物の 顕微鏡組織(1)	227	IV-2・写真12 埴埴溶融付着物 (TAI-8その1) の特性X線像と定量分析値	238
IV-2・写真2 埴埴(トリベ)付着物の 顕微鏡組織(2)	228	IV-2・写真13 埴埴溶融付着物 (TAI-8その2) の特性X線像と定量分析値	239
IV-2・写真3 埴埴(トリベ)付着物の 顕微鏡組織(3)	229	IV-4・写真1 胎土1・2顕微鏡写真	271
IV-2・写真4 埴埴(トリベ)付着物の 顕微鏡組織(4)	230	IV-4・写真2 胎土3・4顕微鏡写真	272
IV-2・写真5 埴埴溶融付着物 (TAI-1) の 特性X線像と定量分析値	231	IV-4・写真3 胎土5・6顕微鏡写真	273
IV-2・写真6 埴埴溶融付着物 (TAI-2) の 特性X線像と定量分析値	232	IV-4・写真4 胎土7・8顕微鏡写真	274
IV-2・写真7 埴埴溶融付着物 (TAI-3) の 特性X線像と定量分析値	233	IV-4・写真5 胎土9・10顕微鏡写真	275
IV-2・写真8 埴埴溶融付着物 (TAI-4) の 特性X線像と定量分析値	234	IV-4・写真6 胎土11・12顕微鏡写真	276
IV-2・写真9 埴埴溶融付着物 (TAI-5) の 特性X線像と定量分析値	235	IV-4・写真7 胎土13・14顕微鏡写真	277
IV-2・写真10 埴埴溶融付着物 (TAI-6) の 特性X線像と定量分析値	236	IV-4・写真8 胎土15・16顕微鏡写真	278
IV-2・写真11 埴埴溶融付着物 (TAI-7) の 特性X線像と定量分析値	237	IV-4・写真9 胎土17・18顕微鏡写真	279
		IV-4・写真10 胎土19・20顕微鏡写真	280
		IV-4・写真11 胎土21・22顕微鏡写真	281
		IV-4・写真12 胎土23・24顕微鏡写真	282
		IV-4・写真13 胎土25・26顕微鏡写真	283
		IV-4・写真14 胎土27・28顕微鏡写真	284
		IV-4・写真15 胎土29・30顕微鏡写真	285
		IV-4・写真16 胎土31・32顕微鏡写真	286
		IV-4・写真17 胎土33顕微鏡写真	287

写真図版目次

I 調査区の調査成果

図版 I-1 遺跡周辺航空写真

図版 I-2 黒姫山古墳および太井遺跡周辺航空写真

図版 I-3 古墳時代～古代B・C地区遺構 谷

1. 6 Bトレンチ谷B-1
2. 1 Cトレンチ谷C-1
3. 7 Bトレンチ谷B-1土層出土状況

図版 I-4 I調査区と黒姫山古墳

1. I調査区と黒姫山古墳(西から)
2. I調査区と黒姫山古墳(南東から)

図版 I-5 古墳時代D・E地区遺構 さば山古墳

1. さば山古墳完備状況(北から)
2. さば山古墳遺物出土状況(東から)

図版 I-6 古墳時代D・E地区遺構 さば山古墳

1. さば山古墳周溝内埴輪・葦石出土状況(西から)
2. さば山古墳周溝内葦石検出状況(東から)

図版 I-7 古墳時代D地区遺構 さば山古墳

1. さば山古墳前部(北から)
2. さば山古墳前部(西から)

図版 I-8 古墳時代D地区遺構 さば山古墳

1. さば山古墳周溝北側断面(西から)
2. さば山古墳周溝東側断面(北から)
3. さば山古墳周溝西側断面(南から)

図版 I-9 古代A・D地区遺構 溝

1. 1 Aトレンチ西半部(北西から)
2. 1 Aトレンチ西半部(南東から)
3. 5 Dトレンチ東端部(南西から)

図版 I-10 古代B地区遺構 溝B-32

1. 溝B-32(東から)
2. 溝B-32 氾濫集積状況(南西から)

図版 I-11 古代B・C地区遺構

1. 溝B-32(西から)
2. 5 Cトレンチ東半部(南東から)

図版 I-12 古代D・E地区遺構

1. 5 Dトレンチ東端部(北から)
2. 1 Eトレンチ西端部縦状遺構E-2検出状況(北西から)

図版 I-13 中世～近世A・B地区遺構 土坑

1. 2 Aトレンチ全景(北から)
2. 1 Bトレンチ全景(北から)

図版 I-14 古代～中世A・C・E地区遺構

1. 1 Cトレンチ西端部(西から)
2. 1 Eトレンチ西端部縦状遺構E-2検出状況(北から)
3. 土坑A-11馬骨出土状況

図版 I-15 中世C地区遺構

1. 1 Cトレンチ西半部全景(北東から)
2. 1 Cトレンチ西半部全景(南西から)

図版 I-16 中世C地区遺構 溝

1. 1 CトレンチⅢ層上面溝検出状況(南西から)
2. 溝C-13遺物出土状況(南から)

図版 I-17 中世C・D地区遺構

1. 建物D-1(西から)
2. ビットD-7瓦器検出状況(北から)
3. 井戸C-20(北東から)

図版 I-18 中世C地区遺構 井戸

1. 井戸C-10(南西から)
2. 井戸C-12(南西から)

図版 I-19 中世C地区遺構 井戸

1. 井戸C-13(北西から)
2. 井戸C-18(北西から)

図版 I -20 中世C地区遺構 井戸C-18

1. 井戸C-18 (北西から) 2. 井戸C-18 漆器出土状況

図版 I -21 中世D地区遺構

1. 3Dトレンチ全景 (南から) 2. 3Dトレンチ全景 (南東から)

図版 I -22 古墳時代・中世D地区遺構 土坑

1. 土坑D-7 遺物出土状況 (南から) 2. 土坑D-30 (南から)

図版 I -23 古代・近世D地区遺構

1. 2Dトレンチ西端部 (東から) 2. 3Dトレンチ西半部 (南東から)
3. 井戸D-1 (北東から) 4. 井戸D-1 木白出土状況 (北東から)

図版 I -24 近世A・C地区遺構 犁溝群

1. 1Aトレンチ西半部Ⅱ層上面犁溝群 (北東から) 2. 1Cトレンチ東半部Ⅱ層上面井戸・犁溝群 (南西から)

図版 I -25 旧石器～弥生時代石器

A地区Ⅳb層・E地区Ⅱ層・A地区表採・D地区Ⅰ層

図版 I -26 旧石器～弥生時代石器

E地区Ⅱ層・A地区Ⅳb層・B地区Ⅳa層・C地区Ⅳb層・溝B-8・B地区Ⅲ層

図版 I -27 古墳時代遺物 (D地区)

さば山古墳周溝内

図版 I -28 古墳時代遺物 (D地区)

さば山古墳周溝内

図版 I -29 古墳時代遺物 (B・D地区)

さば山古墳周溝内・包含層

図版 I -30 古墳時代遺物 (B・C・D地区)

包含層井戸D-2・包含層

図版 I -31 平安時代遺物 (B・C地区)

谷A-1・谷B-1・谷C-1・溝B-32・溝D-14

図版 I -32 中世遺物 (C地区)

溝C-27・溝C-13・井戸C-11・出土地不詳

図版 I -33 中世遺物 (C地区)

井戸C-11・井戸C-12・井戸C-13・井戸C-14・井戸C-15

図版 I -34 中世遺物 (C地区)

井戸C-16・井戸C-17

図版 I -35 中世遺物 (C地区)

井戸C-17

図版 I -36 中世遺物 (C・D地区)

井戸C-18・土坑D-7

図版 I -37 中世遺物 (D地区)

土坑D-7

図版 I -38 中世遺物 (C地区)

土坑C-6・土坑C-87

図版 I -39 平安時代・中世遺物 (C地区)

土坑C-89・土坑C-103・土坑C-104・土坑C-118

図版 I -40 中世遺物 (B・C地区)

土坑C-134・溝B-101

図版 I -41 中世遺物 (B地区)

溝B-101

図版 I -42 中世遺物 (B地区)

溝B-101

図版 I -43 中世遺物 (B地区)

溝B-101

図版 I -44 中世遺物 (B・C地区)

溝B-101・土坑B-101・土坑B-102・包含層

図版 I -45 中世遺物 (B地区)

溝B-101・溝B-202・包含層

図版 I -46 中世遺物 (B地区)

溝B-101・溝B-202・包含層

図版 I -47 中世遺物 (B地区)

溝B-101・溝202・包含層

図版 I -48 中世遺物 (B地区)

溝B-101・溝B-202・出土地不詳

図版 I -49 中世遺物 (B地区)

井戸B-8・井戸B-9・土坑B-44・土坑B-21

図版 I -50 中世遺物 (D地区)

井戸D-1

II 調査区の調査成果

図版 II -1 古墳時代H地区遺構

1. 1号墳 (東から) 2. 3号墳 (南から)

3. 3号墳西側周溝内遺物出土状況(東から)

図版Ⅱ-2 古墳時代～古代H地区遺構 円筒埴輪棺H-1

1. 埴輪円筒棺H-1 上部を覆っていた埴輪片除去後(南から)
2. 埴輪円筒棺H-1 東側小口部
3. 埴輪円筒棺H-1 中央部
4. 埴輪円筒棺H-1 西側小口部
5. 埴輪円筒棺H-1 東側小口部(西から)

図版Ⅱ-3 古墳時代～古代H地区遺構 円筒埴輪棺H-1

1. 埴輪円筒棺H-1 上部を蓋として覆っていた埴輪片除去後(北から)
2. 埴輪円筒棺H-1 東側小口部(北から)
3. 埴輪円筒棺H-1 東側小口部(西から)
4. 埴輪円筒棺H-1 西側小口部(北から)
5. 埴輪円筒棺H-1 北側側面部(南から)

図版Ⅱ-4 古墳時代～古代H地区遺構 土墳墓

1. 土墳墓H-2(南東から)
2. 土墳墓H-1(北から)
3. 土墳墓H-1(南から)

図版Ⅱ-5 古墳時代I地区遺構 自然流路

1. 自然流路I-1(北から)
2. 自然流路I-1土層断面(南から)
3. 自然流路I-1土器出土状況
4. 自然流路I-2(南西から)

図版Ⅱ-6 古代F地区遺構

1. 1Fトレンチ自然流路F-1・溝F-30(北から)
2. 2Fトレンチ自然流路F-1・溝F-46(南から)

図版Ⅱ-7 古代G地区遺構 溝G-2

1. 溝G-2(北から)
2. 溝G-2(南から)
3. 溝G-2紡錘車出土状況(南から)
4. 溝G-2紡錘車出土状況(南から)
5. 溝G-2紡錘車出土状況(南から)

図版Ⅱ-8 古代F地区遺構

1. 建物F-1・溝F-1(西から)
2. 1Fトレンチ東端部ピット群(北から)

図版Ⅱ-9 古代H地区遺構

1. H地区全景(東から)
2. H地区東端部(南東から)

図版Ⅱ-10 古代H地区遺構

1. 2Hトレンチ全景(東から)
2. 2Hトレンチ西半部(南から)

図版Ⅱ-11 古代H地区遺構 建物

建物H-3・建物H-4周辺空中写真

図版Ⅱ-12 古代H地区遺構 建物

1. 建物H-3・建物H-4(南から)
2. 建物H-4(南から)

図版Ⅱ-13 古代H地区遺構 建物

1. 建物H-3(北から)
2. 建物H-3(西から)

図版Ⅱ-14 古代H地区遺構 建物柱穴

1. ピットH-69(建物H-3)(西から)
2. ピットH-303(建物H-3)(東から)
3. ピットH-81(建物H-4)(東から)
4. ピットH-82(建物H-4)(東から)

図版Ⅱ-15 古代H地区遺構 建物

1. 建物H-5(南から)
2. 建物H-6(南東から)
3. 建物H-7(東から)
4. 建物H-8(北東から)

図版Ⅱ-16 古代H地区遺構 溝H-63

1. 溝H-63(東から)
2. 溝H-63土層断面(東から)

図版Ⅱ-17 古代H地区遺構

1. 溝H-58遺物出土状況(東から)
2. 3Hトレンチ東端部(西から)

図版Ⅱ-18 古代G・H地区遺構

1. 建物G-15(北から) 2. 土坑H-39(東から)
3. 土坑H-39遺物出土状況(南から)
- 図版Ⅱ-19 古代H地区遺構 鑄造工房
1. 3Hトレンチ鑄造工房遠景(東から) 2. 鑄造工房H-2・鑄造工房H-3(東から)
- 図版Ⅱ-20 古代H地区遺構 鑄造工房H-1
1. 鑄造工房H-1(北から) 2. 鑄造工房H-1鉋沖等検出状況(北から)
3. 鑄造工房H-1内機土層まりH-1・H-2検出状況(西から) 4. 鑄造工房H-1と同層取出土状況(北から)
- 図版Ⅱ-21 古代H地区遺構 鑄造工房H-3
1. 鑄造工房H-3炭層内遺物出土状況(西から) 2. 鑄造工房H-3炭層内遺物出土状況(北から)
- 図版Ⅱ-22 古代H地区遺構 鑄造工房H-3
1. 鑄造工房H-3南半部土層横断面(西から) 2. 鑄造工房H-3南半部土層横断面(北から)
3. 鑄造工房H-3北半部土層横断面(北から) 4. 鑄造工房H-3内焼土坑H-1(北から)
- 図版Ⅱ-23 古代H地区遺構 鑄造工房H-3
1. 鑄造工房H-3内焼土坑H-2(北から) 2. 鑄造工房H-3内土坑H-70遺物出土状況(西から)
3. 鑄造工房H-3炭層内遺物出土状況(東から) 4. 溝H-74土層断面(南から)
- 図版Ⅱ-24 古代H地区遺構 鑄造工房H-3
1. 鑄造工房H-3(北から) 2. 鑄造工房H-3遺物出土状況(東から)
- 図版Ⅱ-25 古代H地区遺構 鑄造工房
1. 鑄造工房H-2(東から) 2. 鑄造工房H-2・溝H-74(北から)
3. 鑄造工房H-3炭層内遺物出土状況(東から)
- 図版Ⅱ-26 古代H地区遺構 井戸H-10
1. 井戸H-10 1段目井筒輪検出状況(東から) 2. 井戸H-10 1段目井筒輪検出状況(東から)
- 図版Ⅱ-27 古代H地区遺構 井戸H-10
1. 井戸H-10 2段目井筒輪検出状況(北から) 2. 井戸H-10 3段目井筒輪検出状況(西から)
- 図版Ⅱ-28 古代H地区遺構 井戸H-10
1. 井戸H-10 3・4段目井筒輪検出状況(北から) 2. 井戸H-10 4段目井筒輪検出状況(北から)
- 図版Ⅱ-29 古代H地区遺構 井戸H-10
1. 井戸H-10 上層遺物出土状況(南から) 2. 井戸H-10 上層遺物出土状況(南から)
3. 井戸H-10 井筒輪上面遺物出土状況(北から)
- 図版Ⅱ-30 古代H地区遺構 井戸H-10
1. 井戸H-10 最下層遺物出土状況(西から) 2. 井戸H-10 最下層遺物出土状況(西から)
3. 井戸H-10 最下層遺物出土状況(西から)
- 図版Ⅱ-31 古代H地区遺構 井戸H-10
1. 井戸H-10 3段目井筒輪透孔閉塞状況(西から) 2. 井戸H-10 3段目井筒輪透孔閉塞状況(西から)
3. 井戸H-10 底面敷石検出状況(西から) 4. 井戸H-10 調査風景(東から)
- 図版Ⅱ-32 古代G地区遺構 井戸G-12
1. 井戸G-12上層(北から) 2. 井戸G-12最下層(南から)
3. 井戸G-12上層遺物出土状況(南から) 4. 井戸G-12最下層遺物出土状況(東から)
- 図版Ⅱ-33 古代H・I地区遺構
1. 3Iトレンチ全景(北から) 2. 3Iトレンチ北半部(東から)
3. 溝H-65土層断面(西から) 4. 土坑I-71(北から)
5. 土坑I-71(南から)
- 図版Ⅱ-34 古代I地区遺構
1. 18Iトレンチ全景(北から) 2. 17Iトレンチ全景(東から)

図版Ⅱ-35 古代Ⅰ地区遺構

1. 10 I トレンチ全景 (北から) 2. 10 I トレンチ全景 (北から)
3. ビットI-509 (北から) 4. ビットI-510 (東から)

図版Ⅱ-36 古代Ⅰ地区遺構

1. 12 I トレンチ全景 (北から) 2. 12 I トレンチ全景 (西から)
3. 13 I トレンチ全景 (西から) 4. 15 I トレンチ全景 (東から)

図版Ⅱ-37 古代Ⅰ地区遺構

1. 4 S I トレンチ全景 (南から) 2. 9 I トレンチ全景 (北から)
3. 6 I トレンチが壁集積遺構I-1 (南から) 4. 6 I トレンチが壁集積遺構I-1 細部 (東から)

図版Ⅱ-38 古代Ⅰ地区遺構 井戸I-14

1. 井戸I-14 (南西から) 2. 井戸I-14 土層断面 (南から)
3. 井戸I-14 遺物出土状況 (南東から)

図版Ⅱ-39 古代～中世G地区遺構

1. 建物G-2 (北から) 2. 建物G-2・溝G-2 (北から)

図版Ⅱ-40 旧石器～縄紋時代石器

自然流路F-1・溝H-53・鋳造工房H-3・溝H-63・包含層

図版Ⅱ-42 古墳時代遺物 (H地区)

1号墳・3号墳・4号墳・埴輪円筒棺H-1

図版Ⅱ-44 古墳～奈良時代遺物 (G・H地区)

溝G-47・溝G-51・井戸G-12・土坑G-41・溝H-8

図版Ⅱ-46 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-63

図版Ⅱ-48 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-63・土坑H-56

図版Ⅱ-50 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-74

図版Ⅱ-52 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-66・溝H-70・溝H-77

図版Ⅱ-54 飛鳥時代遺物 (H地区)

井戸H-10

図版Ⅱ-56 飛鳥時代遺物 (H地区)

井戸H-10

図版Ⅱ-58 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-1・鋳造工房H-2

図版Ⅱ-60 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3

図版Ⅱ-62 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3

図版Ⅱ-64 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3・溝H-74

図版Ⅱ-66 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3・溝H-74

図版Ⅱ-68 奈良時代遺物 (H地区)

図版Ⅱ-41 縄紋～弥生時代石器

溝H-53・自然流路F-1・鋳造工房H-1・包含層

図版Ⅱ-43 古墳～飛鳥時代遺物 (F・I地区)

自然流路F-1・自然流路I-1

図版Ⅱ-45 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-53・溝H-58・溝H-60

図版Ⅱ-47 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-63・鋳造工房H-1

図版Ⅱ-49 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-63・溝H-64・溝H-78・鋳造工房H-3

図版Ⅱ-51 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

溝H-69・溝H-74・鋳造工房H-3

図版Ⅱ-53 飛鳥時代遺物 (H地区)

溝H-63・溝H-77・井戸H-10・谷埋土

図版Ⅱ-55 飛鳥時代遺物 (H地区)

井戸H-10

図版Ⅱ-57 飛鳥～奈良時代遺物 (H地区)

土坑H-39・土坑H-48・鋳造工房H-1・ビットH-208

図版Ⅱ-59 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-2・鋳造工房H-3

図版Ⅱ-61 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3・溝H-74

図版Ⅱ-63 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3

図版Ⅱ-65 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3・溝H-74

図版Ⅱ-67 奈良時代遺物 (H地区)

鋳造工房H-3・溝H-74

図版Ⅱ-69 奈良時代遺物 (H地区)

鑄造工房 H-1・鑄造工房 H-3
図版Ⅱ-70 奈良時代～中世遺物 (H・I 地区)
溝 H-15・谷埋土・包含層

鑄造工房 H-2,3・溝 H-66・溝 H-74
図版Ⅱ-71 奈良時代遺物 (H地区)
溝 H-53・包含層

Ⅲ 調査区の調査成果

図版Ⅲ-1 旧石器時代 J 地区

- 2・4 J トレンチ石器出土状況 (西から)
- 2・4 J トレンチ石器出土状況 (西から)

図版Ⅲ-2 縄紋時代 J 地区遺構 自然流路 J-2

- 自然流路 J-2 南側縄紋土器出土状況
- 自然流路 J-2 南側縄紋土器出土状況

図版Ⅲ-3 古墳時代 J 地区遺構 自然流路 J-2

- 5 J トレンチ全景 (西から)
- 自然流路 J-2 遺物出土状況

図版Ⅲ-4 古墳時代 J 地区遺構 ビット

- ビット J-1 (北から)
- ビット J-2 上層断面 (北から)
- ビット J-2 (北から)

図版Ⅲ-5 古墳時代 J 地区遺構 自然流路 J-1

- 自然流路 J-1 (南から)
- 2・4 J トレンチ東半部 (南西から)

図版Ⅲ-6 古代 J 地区遺構 溝

- 溝 J-9・11・12 (北から)
- 10 J トレンチ全景 (西から)

図版Ⅲ-7 古墳時代～古代 J 地区遺構

- 2・4 J トレンチ西半部 (西から)
- 2・4 J トレンチ西半部 (西から)

図版Ⅲ-8 古代 J 地区遺構 建物

- 建物 J-1 (東から)
- 建物 J-2 (西から)

図版Ⅲ-9 古代～中世 J 地区遺構

- 1・3 J トレンチ東半部及び 5 J トレンチ全景 (西から)
- 1 J トレンチ横検出状況 (西から)

図版Ⅲ-10 古代 J 地区遺構 炉壁集中部

- 炉壁集中部 J-1 (東から)
- 炉壁集中部 J-4 (北から)

図版Ⅲ-11 古代 J 地区遺構 炉壁集中部 J-2

- 炉壁集中部 J-2 検出 (北から)
- 炉壁集中部 J-2 (北から)

図版Ⅲ-12 古代～中世 J 地区遺構

- 8 J トレンチ全景 (東から)
- 土坑群 (土坑 J-4・6～9) (西から)

図版Ⅲ-13 古代 J 地区遺構

- 土坑 J-8・9 (北から)
- 土坑 J-4 断面 (南から)
- ビット J-76 土器出土状況

図版Ⅲ-14 近世 K 地区遺構

- K 地区全景 (西から)
- 1 K トレンチ V 層上面足跡検出状況 (北から)

図版Ⅲ-15 旧石器時代石器 (J 地区)

旧石器包含層第 1 地点出土石器・石核

図版Ⅲ-17 旧石器時代石器 (J 地区)

旧石器包含層第 1 地点出土剥片

図版Ⅲ-19 旧石器時代石器 (J 地区)

ナイフ形石器・舟底形石器・有舌尖頭器

図版Ⅲ-16 旧石器時代石器 (J 地区)

旧石器包含層第 1 地点出土石器 (石核・二次加工のある剥片)

図版Ⅲ-18 旧石器時代石器 (J 地区)

旧石器包含層第 2 地点出土石器 (剥片・使用痕のある剥片)

図版Ⅲ-20 旧石器時代石器 (J 地区)

鏃歯縁石器・石核・剥片

図版Ⅲ-21 縄紋～弥生時代石器（J地区） 石鏃・石楯	図版Ⅲ-22 縄紋～弥生時代石器（J地区） 石鏃・石楯
図版Ⅲ-23 旧石器～弥生時代石器（J地区） 楔形石器	図版Ⅲ-24 旧石器～弥生時代石器（J地区） 削器（表面）
図版Ⅲ-25 旧石器時代石器（J地区） 削器（裏面）	図版Ⅲ-26 旧石器時代石器（J地区） 石核
図版Ⅲ-27 旧石器時代石器（J地区） 石核	図版Ⅲ-28 縄紋時代遺物（J地区） 自然流路J-2
図版Ⅲ-29 古墳時代遺物（J地区） 自然流路J-2・ピットJ-1・ピットJ-2	図版Ⅲ-30 古墳時代遺物（J地区） 自然流路J-1・自然流路J-2・ピットJ-2
図版Ⅲ-31 奈良時代遺物（J地区） 溝J-9	図版Ⅲ-32 平安時代遺物（J地区） 溝J-8・溝J-25・土坑J-4・ピットJ-15・包合層・阿曇塚中部J-1

付 図 目 次

第Ⅰ部 Ⅰ調査区の調査成果


付図Ⅰ-1 Ⅰ調査区全体図

第Ⅱ部 Ⅱ調査区の調査成果


付図Ⅱ-1 Ⅱ調査区全体図

第Ⅲ部 Ⅲ調査区の調査成果

付図Ⅲ-1 Ⅲ調査区全体図



序 調査の概要と遺跡の立地



第1章 調査の概要と前提

第1節 発掘調査に至る経過

近畿自動車道松原すさみ線（旧松原海南線）は、近畿自動車道天理吹田線の松原ジャンクションより南に分岐し、和歌山県海南市を経てすさみ町に至る高速道路である。一方、府道松原泉大津線は、府道中央環状線の美原ロータリーより南に分岐し、泉大津市助松で府道大阪臨海線と結ぶ都市計画道路である。この両道は、美原ロータリーから堺市小阪まで併設され、中央に高架橋方式の高速道路、両側に平面方式の府道が建設される。

この道路建設予定地には多くの遺跡の存在が予想されたため、早くよりその取扱いについて大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団大阪建設局等の関係機関の間で協議が続けられてきた。その内の府道堺かつらぎ線（泉北2号線）以西の松原泉大津線単独区間については、1974年度に（財）大阪文化財センター（以下、センターと略す）により周知の和泉市・高石市・泉大津市の大園遺跡、和泉市観音寺遺跡の試掘調査と、それ以外の路線内の分布調査を実施した¹⁾。この分布調査によって、鶴田池東・西浦橋・菱木下・万崎池・太平寺遺跡が新たに発見された。これらの遺跡の内、大園²⁾・観音寺³⁾・鶴田池東⁴⁾・西浦橋遺跡（西半部）⁵⁾については、大阪府教育委員会の手により順次本調査が実施されている。また、西浦橋（東半部）・菱木下・万崎池・太平寺遺跡については、センターにより1980～1983



序-図1 調査地の位置

年度に本調査を実施している⁶⁾。

府道堺かつらぎ線以東の併設区間については、1974年度にセンターが予備的な分布調査を実施し、確認された遺跡内の真福寺遺跡について1975年度にセンターで試掘調査を実施した⁷⁾。その後、1977年度に大阪府教育委員会の手で再度分布調査が実施され、多くの遺跡の存在が確認された。その結果を受けて、関係機関の間で協議が進められ、できるだけ路線が埋蔵文化財をさげるとともに、やむを得ず路線にかかる遺跡については発掘調査を実施することになった。現地調査は、大阪府教育委員会の指導の下に引き続きセンターが担当することになり、1981年12月に大阪府教育委員会・大阪府土木部・日本道路公団大阪建設局・センターの関係4機関の間で基本協定が締結された。調査の対象となった遺跡は、美原町城の丹上・真福寺・太井遺跡、美原町から堺市域にかけての日置荘遺跡、堺市域の福田・平井・小阪遺跡である。なお、平井遺跡については、諸般の事情により(財)大阪府埋蔵文化財協会に調査を委ねており、1986～1989年度に調査が実施されている⁸⁾。

太井遺跡は、主に美原町黒山、太井にかけて所在し、東西0.6km、南北約1.3kmの広がりを持つ。今回はそのほぼ中央を北東から南西に向けて調査しており、その総延長は約1.2kmにも及んでいる。当該範囲は、調査前に2×2mの試掘グリッドによる試掘調査を実施し、全域が調査の必要ありと判断された。そのため、1985年12月より本調査を開始している。

実際の調査では、この範囲を大きく3分割し、東側の真福寺遺跡との協会となる谷部から国道309号線までをⅠ調査区(調査時はその1調査区)国道309号線から町道までをⅡ調査区(調査時はその2調査区)、町道から西除川右岸までをⅢ調査区(調査時はその3調査区)として調査を実施した。しかし、Ⅱ調査区の西側部分をはじめとする一部では用地問題の解決の遅れによって調査が遅れ、この部分については(その4)調査区として1989年度以降に調査を行っているほか、他の道路や水路部分についても調査可能となった時点で順次調査にかかるということで、1988年4月から1991年3月までかけて細切れの調査を実施している。

この間、調査成果の早期公開を狙いとして、5冊の概要報告書を刊行している⁹⁾。本調査終了後、1994年4月から1995年3月までの間、遺物整理事業として発掘資料の各種整理作業を実施し、本報告書作成を行った。本報告書は、1995年度に印刷作業を行い、1996年3月31日付けをもって刊行した。

註

- 1) 大阪文化財センター1975『都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書』
- 2) 大阪府教育委員会1976『大園遺跡発掘調査概要Ⅲ』
大阪府教育委員会1981『大園遺跡発掘調査概要Ⅴ』
大阪府教育委員会1982『大園遺跡発掘調査概要Ⅶ』
- 3) 大阪府教育委員会1982『観音寺遺跡発掘調査報告書』
- 4) 大阪府教育委員会1980『西蒲橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』
大阪府教育委員会1982『鶴田池東遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 5) 大阪府教育委員会1980『西蒲橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』
- 6) 大阪文化財センター1984『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
大阪文化財センター1984『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 7) 大阪文化財センター1975『美原町真福寺所在遺跡試掘調査報告書』
- 8) 大阪府埋蔵文化財協会1988『平井遺跡』
大阪府埋蔵文化財協会1989『平井遺跡Ⅱ』
- 9) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987『太井遺跡(その1)』
大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987『太井遺跡(その2)』
大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987『太井遺跡(その3)』
大阪府教育委員会・大阪文化財センター1990『太井遺跡(その4ほか)・日置荘遺跡(その1-2)』
大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987『日置荘遺跡(その2-3・その6-2)』

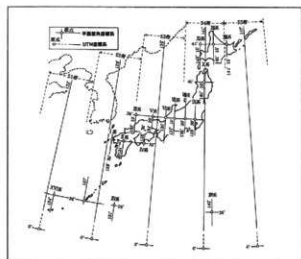
第2節 発掘調査の方法

太井遺跡の調査は、当センターが制定した「遺跡調査基本マニュアル」に則って実施されている。このマニュアルが制定された契機は、近畿自動車道天理吹田線（通称大阪線）の調査がそれぞれの調査区の担当者によりバラバラな方法で行われたため、後の整理段階でデータの理解に非常に苦勞したことに起因している。マニュアル作成にあたっては、発掘調査に関わる職員全員が討議に参加し、意見の一致をみた部分のみを成文化した。そのため、発掘調査に不可欠な必要最低限の方法のみを定めたものとなっている。

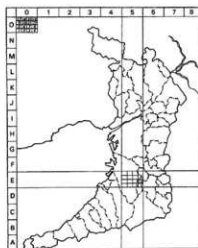
地区割については、国土座標軸（第IV座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区画できるように、大小6段階の区画を設定している。第I区画は1/10000地形図の地区割図をそのまま利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。

第II区画は、1/2500地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。

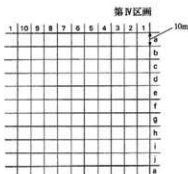
第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端



国土座標系図



第I・II区画



序-図2 国土座標系とそれに伴う地区割

を基点に縦A～O、横1～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。

第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を5m単位で4分割するもので、遺物の取り上げ等の際に第Ⅳ区画を面として細分擦る場合に使用する。北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳと呼称する。第Ⅵ区画は第Ⅳ区画を5m単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を基点に必要な桁まで表示する。

ちなみに今回の太井遺跡の調査範囲の第Ⅰ区画はE-5、第Ⅱ区画は16である。第Ⅲ区画以下は、A1(第Ⅲ区画) a1(第Ⅳ区画) - I(第Ⅴ区画) S2.30m W3.10m(第Ⅵ区画) というように表示される。

方位については、座標北を使用している。これは、地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ $0^{\circ} 15' 39''$ 、磁北が西へ $6^{\circ} 30'$ 振っている。

水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面(T.P.)を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾平均海面(O.P.)も併用されており、今も大阪府関係等の土木工事で盛んに使用されている。過去の報告書の中には、表記がなくてどちらを使用しているか判別できない場合もある。なお、両者のレベル差は、 $T.P. \pm 0m = O.P. + 1.3m$ と定められている。

今回の太井遺跡の調査では、大きく3調査区に分割している。それらの調査区は、さらに道路や水路等の障害物で細分されるため、Ⅰ調査区がA～E地区、F～I地区、J～K地区と11地区に細分されている。各地区は、それぞれの地区の実状にあわせてトレンチに細分されるが、呼称は3Aトレンチという形の数字を前に出す方式である。

各調査区の位置と地区については各調査区の項の冒頭において1/15000の平面図に記している。また、第Ⅲ区画についてはトレンチ配置図とともに1/4000の平面図に、第Ⅳ区画の10mグリッドについては1/2000の平面図に統一して付している。各調査区の冒頭には、それぞれの調査経過の具体的な内容についても詳しく記しているので、それを参照されたい。

遺構番号については、各調査区で細切れた調査を強いられたこともあって命名法に若干の混乱を来した部分もあった。そのため、本報告では各地区毎に一連の番号をふることに統一している。遺構番号がかわってものについては、主要遺構一覧表に新旧の対比を行っている。

なお、併設区間の調査は、1986年度より3段階調査方式が採用されている。その方法は、まず第1次調査として測道となる府道の歩道部分5mを第1遺構面もしくは包含層上面まで機械掘削し、調査の必要範囲を決定する。その後、第2次調査として調査が必要と判断された範囲の府道部分(上下線各約20m)を全面調査し、そこで確認された遺構・遺物の分布をもとに保存すべき箇所を避けて高速道路の橋脚位置を決定する。第3次調査は、高速道路内の橋脚基礎部とそれ以外の特に必要と認められる部分を対象として実施するものである。このような複雑な調査方法が採用されたのは、過去の経緯から全面調査を基本としてきた府道方式と、いわゆる「トレンチ調査方式」という2段階調査を採用してきた近畿自動車道天理吹田線方式との折衷が図られたためである。太井遺跡もこの方式が採用されている。

調査の過程では、できるだけ遺跡を一般公開すべく、適宜現地説明会を開催している。Ⅱ調査区では1986年11月22日に飛鳥・奈良時代の掘立柱建物群および鋳造遺構群を対象として現地の公開を行っている。

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形環境

太井遺跡は、大阪府南河内郡美原町下黒山から太井にかけて所在する遺跡である。

遺跡の北東は開析谷を挟んで真福寺遺跡と隣接し、西側の日置荘遺跡とは西除川を挟んで隔たっている。

遺跡は南北約1.4km、東西約0.65kmの範囲に広がっている。なお、当遺跡はその範囲の中に黒姫山古墳およびその周辺の高墳群を包括しているが、黒姫山古墳を除けば、これまでの考古学的調査はきわめて少なく、旧石器時代から近世に至る遺物が出土することは知られているものの、詳細については不明な部分が多いのが現状として認識されることであった。

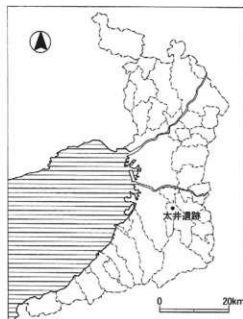
ただし、今回の太井遺跡同様、道路建設に伴って当遺跡の北では真福寺遺跡が、西除川を挟んだ西側では日置荘遺跡が調査されている。これによって、太井遺跡周辺における各時代の遺構変遷が徐々にではあるが明らかとなりつつある。

さて、遺跡周辺の地形環境を概観すると、南には中央構造線に沿って存在する和泉山脈から北に広がる河泉丘陵および河泉台地を特徴としている。

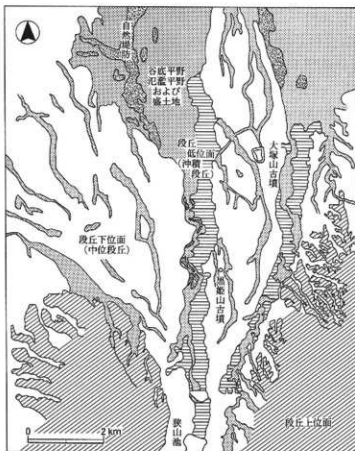
当遺跡の所在する美原町は西には陶器山丘陵、東には羽曳野丘陵があり、その中央に段丘面を構成する複雑な様相を呈している。

なお、この段丘面には後期更新世の上位段丘から下位段丘、完新世以降の低位段丘が形成されており、非常に狭量な地域のなかに起伏のある複雑な地形を呈しているものといえる。

また、遺跡の所在する美原町の東西には、東除川と西除川が台地を浸食しつつ北流している。東除川の東側は、羽



序-図3 太井遺跡の位置



序-図4 太井遺跡周辺の地形

曳野丘陵が西に向かって緩やかに傾斜しており、無数の小川によって丘陵縁辺部は複雑な地形を呈している。東除川はこれらの影響により、浸食が激しく狭く深い谷底平野を形成している。

一方の西除川は、過去には上流に存在する天野川と同一河川であったが、狭山池の築造により2分されたものである。東除川とは異なり、段丘崖は発達せず、浅く平坦な谷底平野を形成するに至っている。

なお、当遺跡は西除川右岸段丘および谷底平野に立地している。ちなみに谷底平野に該当するのはⅢ調査区のK地区であり、同調査区以东については基本的には段丘上に該当している。

しかしながら、各調査区では随所で開析谷が入り込んでおり微視的には複雑な地形を呈している。東のⅠ調査区から順に瞥見する。

Ⅰ調査区は遺跡の南側に遺存している表層条里地割が複雑に入り組む開析谷によって乱れる部分に位置している。とくに黒山集落の南約250mに所在する新池から派生する開析谷は非常に明瞭であり、蛇行しながら黒姫山古墳の東側を通り、北へとびている。

ちなみにⅠ調査区では現地表面での標高は調査区南西端の最高所で約44m、北東端の最低所で約38mを測る。大局的にはおよそ1.5%の斜面地形を有していることになる。また、西側のD・E地区は黒姫山古墳が占地する台地状の高まりに該当し、C地区のほぼ中央から以東が先に記した南の新池からのびる開析谷であり、これによって東の真福寺遺跡とは隔たっている。

Ⅱ調査区はⅠ調査区とは異なり、南側に遺存している表層条里地割が面的な広がりを見せる部分に該当している。ただし、調査区の東端部および西端部では南北方向の開析谷があり、これによって表層条里型地割はやや乱れている。

ちなみに東端部の開析谷は南側の寺池・蓮池から北側の蔵王蔵池にぬけるものであり、西端部の開析谷は南側の上池から北側のおよび花田池にぬけるものである。

なお、Ⅱ調査区は現地表面での標高は調査区中央部のH地区付近の最高所で約44m、西端にあたるⅠ地区の最低所で約41mを測る。東端のF地区も約43mとやや低いが、他の調査区と比較した場合、現状では起伏が少なく比較的平坦な地形環境にあるといえる。

Ⅲ調査区は西半部のK地区が西除川の氾濫原に該当しており、北側に所在する菅田池の南西コーナー部分にむけて表層地割が大きく乱れる部分に該当する。この部分の標高は39～40m前後を測る。

東半部はこれに沿うように段丘崖が南北にのびており、Ⅰ地区の現地表面の標高は西半部よりも相対的に約2m前後高く、42mを測る。

なお、現況の地形分類では西半部のK地区が西除川によって形成された谷底平野にあたり、全体に平坦である。また、東半部のⅠ地区は洪積世下位段丘面に該当しており、南から北に向けて緩やかに傾斜している状況が看取される。

第2節 歴史的環境

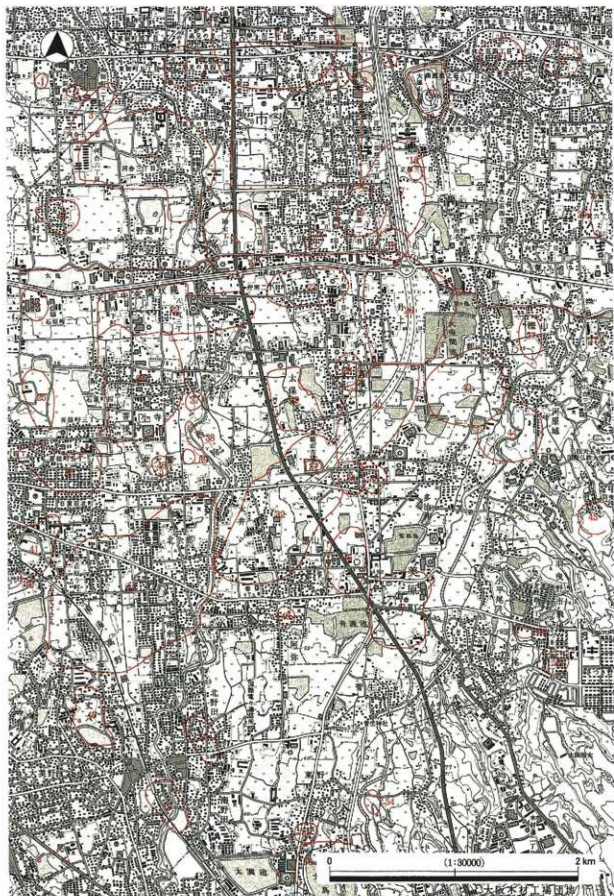
太井遺跡周辺における遺跡分布は図6に記した通りである。

遺跡周辺での旧石器時代の遺構の検出事例は多くはないが、分布図からははずれているが、堺市の南花田遺跡では国府型ナイフ形石器とともに住居跡の可能性も指摘される竅穴状遺構を検出しており、これ以外に周辺の遺跡では明確な遺構は伴わないものの有舌尖頭器などの出土も確認される。

縄紋時代から弥生時代にかけての遺構の検出事例はさほど多くはなく、そのほとんどが当該期の遺物の出土によって、何らかの生活痕跡の存在を示しているに過ぎない。



序-図5 遺跡周辺地形図（明治18年測量）



序-図6 太井遺跡周辺の遺跡分布図

ちなみに太井遺跡周辺では丹上遺跡で石畿・石匙・石包丁などが出土し、東に近接する真福寺遺跡では石畿のほか、弥生時代後期の土器も出土している。

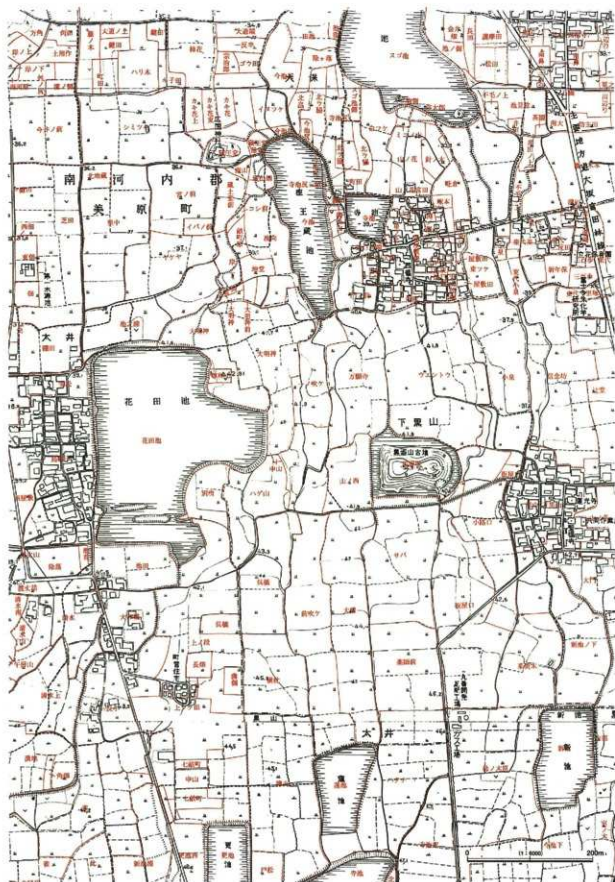
古墳時代では北に河内大塚山古墳、近接して黒姫山古墳と周辺の数基の古墳が造営されている。また、遺跡の南西では日置荘遺跡や丈六遺跡で須恵器の窯跡が検出されているほか、当センター調査の日置荘遺跡および堺市が調査を行った日置荘西町遺跡では埴輪の窯跡が検出されている。

なお、黒姫山古墳は周濠を巡らせた2段築成の前方後円墳であり、全長は114mを測る。昭和22年に行われた調査によって前方部の石室が確認され、そこから櫛付短甲を含む24領の短甲のほか、衝角付冑11点、肩底付冑13点をはじめとする多数の鉄製品が出土している。また、周辺には陪塚とされる数基の古墳が存在していたが、いずれも十分な調査が行われなままに地表からは消滅している。なお、詳細は本文を参照いただきたいが、そのうちの1基であるさば山古墳を今回の調査で確認しており、当該古墳は従来考えられていたような方墳ではなく、帆立貝形古墳であることが明らかとなっている。また、Ⅱ調査区では小規模な方墳群を検出しており、さらにⅢ調査区では自然流路内から円筒埴輪がまとまって出土しており、一見して単独で存在するように見える黒姫山古墳の周辺には削平されて埋没した多数の古墳の存在を考えておく必要がある。

これに関して、Ⅱ調査区で検出した飛鳥時代の井戸などに転用された埴輪は、黒姫山古墳の埴輪とは特徴を異にするものであり、その多くが日置荘の埴輪窯跡で出土したものと共通する特徴を有している。現状では当該埴輪が樹立されていた古墳を見出すことができず、同様の特徴をもつ埴輪の転用や出土が丹上遺跡から日置荘遺跡まで広がっていることから、その中間地点にあたる太井遺跡周辺に当該埴輪を用いていた古墳の存在が示唆される。図7には参考までに周辺の字図を掲げているが、黒姫山古墳の西から南西にかけて「申山」や「ハゲ山」などの字名が残っており、これらも候補の一つになるだろうが、考

序・表1 遺跡地名表

No.	遺跡名称	所在地	時代	種類	No.	遺跡名称	所在地	時代	種類
1	藤田遺跡	松原市	古墳	集落	30	真福寺遺跡	美原町	弥生・飛鳥～中世	集落・生産遺跡
2	八子池遺跡	松原市	中世	散布地	31	須原山古墳	美原町	古墳	前方後円墳
3	南新町遺跡	松原市	古墳～中世	集落	32	太井遺跡	美原町	旧石器、古墳～中世	集落、古墳、生産遺跡
4	河合遺跡	松原市	弥生～中世	集落	33	日置荘遺跡	美原町・堺市	古墳～中世	集落、生産遺跡
5	高見の里遺跡	松原市	縄文～中世	集落	34	黒山廃寺	美原町	白鳳～鎌倉	社寺
6	上田町遺跡	松原市	旧石器～中世	集落、生産遺跡	35	行比神社	美原町	奈良～平安	社寺
7	山ノ内遺跡	松原市	古墳	前方後円墳跡	36	日置荘北町遺跡	堺市	奈良	散布地
8	穂野・池原	松原市	古墳	竪跡	37	長和寺跡	美原町	平安	社寺
9	西大塚遺跡	松原市	中世	集落	38	大塚城上遺跡	美原町	中世	城館
10	大塚山古墳	松原市	古墳	前方後円墳	39	八坂神社遺跡	美原町	平安	社寺
11	忍我之丘遺跡	羽曳野市	古墳～	集落	40	城守寺城跡	美原町	南北朝	城館
12	明教寺跡	羽曳野市	奈良～	社寺	41	日置荘西町遺跡	堺市	古墳	竪跡
13	中村町遺跡	堺市	中世	散布地	42	新池古墳群	堺市		
14	清堂遺跡	松原市	旧石器～中世	集落	43	都戸遺跡	羽曳野市	奈良～中世	散布地
15	藤前寺遺跡	松原市	平安～中世	集落	44	河原城遺跡	羽曳野市	奈良～中世	散布地
16	立塚遺跡	松原市	古墳～中世	集落	45	六ツ塚河原城古墳	羽曳野市	古墳	古墳
17	観音寺遺跡	松原市	古墳～中世	集落	46	黒山遺跡	美原町	奈良～中世	散布地
18	立部古墳群	松原市	古墳	円・方墳	47	平尾遺跡	美原町	奈良	集落
19	観音寺跡	松原市	平安	社寺	48	阿弥陀寺経塚	美原町		経塚
20	伊賀遺跡	羽曳野市	縄文～	集落、墓	49	丈六池遺跡	堺市	古墳・中世	集落、生産遺跡
21	石原町北遺跡	堺市	中世	集落	50	北野田遺跡	堺市	中世	集落
22	八下遺跡	堺市	中世	集落	51	野田城跡	堺市	中世	城館
23	丹南遺跡	松原市	平安～中世	集落	52	平尾城跡群	美原町	奈良	竪跡
24	小寺遺跡	美原町	中世	集落	53	平尾城跡	美原町	南北朝	城館
25	石原町遺跡	堺市	中世	集落	54	麻野遺跡	大阪狭山市		集落
26	丹上遺跡	美原町	弥生～中世	集落	55	東野廃寺跡	大阪狭山市	奈良	社寺
27	藤戸東遺跡	羽曳野市		社寺	56	大島地遺跡	大阪狭山市	縄文	散布地
28	真福寺跡	美原町		社寺	57	平下遺跡	羽曳野市	奈良	集落
29	大塚遺跡	美原町	奈良～中世	集落	58	丹比宗廟宮跡	松原市	旧石器～中世	集落、生産遺跡



序-図7 太井遺跡周辺の字図



序・写1 太井遺跡周辺航空写真

古学的調査が行われておらず、詳細は不明である。

古代では文献上では丹比連や丹比公一族の盤踞する地域であることが看取され、また、奈良時代には中央政界でも活躍する多治比真人氏の本願地として、周辺に展開する古代寺院とともに重要な位置を占めている。

遺跡周辺では南北に難波大道、東西に大津道、丹比道が整備され、平尾遺跡に代表される大規模な集落遺跡が営まれる。これらと関連して狭山池の築造も当遺跡周辺では大きな歴史的变化の一つである。

なお、平尾遺跡では庇付の大型建物跡をはじめとする42棟の掘立柱建物跡が柵を伴って検出され、郡衙または当地を本願地とする有力氏族に関連するものであると考えられている。

周辺には黒山廃寺(34)・丹比廃寺(53)・東野廃寺(55)などの古代寺院が展開しており、このうちの黒山廃寺および丹比廃寺は距離的にも近く、古代氏族との関係においても重要な位置を占めている。

また、平安時代の状況も奈良時代以前の景観と大きくかわるものではないが、日置荘遺跡Ⅲ調査区などでは、この段階に至って新たな集落が営まれていることが確認されており、新たな耕地の拡大がこの段階に進行した状況を看取することができる。

さて、中世ではすでに真福寺遺跡では梵鐘の鑄造遺構と考えられる遺構が検出されるなどしており、文献史上に残る河内鑄物師をぬきにして当地の歴史を語ることはできない。

河内鑄物師の活躍についてはここでその詳細を記述する余裕はないが、これまで主として文献や梵鐘銘文などの金石文を中心として進められてきた研究によって多くの事実が明らかとなっており、今回の太井遺跡を含めた一連の考古学的調査で新たな肉付けが可能となりつつある。


なお、近世以降では基本的には図5に示した景観が広がっていたと考えられ、狭山池および周辺の溜め池による灌漑で主として農耕を基盤とする集落が営まれていたものといえる。

本稿は近接して存在し、基本的には歴史的背景を共通する『日置荘遺跡』の「位置と環境」(鋤柄1995)を基本に除加筆を行ったものである。


なお、これ以外にも当遺跡周辺の調査成果を含めて詳細な検討が行われているものとして、「中世丹南における職能民の集落遺跡」(鋤柄1992)があり、上記報告とともにあわせて参照いただければ幸いである。

参考文献

- 鋤柄俊夫 1992 「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集
鋤柄俊夫 1995 「位置と環境」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター



第 I 部 I 調査区の調査成果



第1章 調査の概要と前提

第1節 位置と地形環境

調査区全体の位置関係については冒頭で記述してきた通りである。

以下では、当該調査区の位置関係および関連する地形等の周辺環境についてのみ簡潔に記しておくことにしたい。

1. 位置 (図 I-1)

I 調査区は美原町黒山から北にのびる里道を東端、国道309号線を西端とする延長約400m、幅60mの区間を包括する調査区である。行政的には大阪府南河内郡美原町下黒山に位置する。

なお、当該調査区は太井遺跡として調査を実施した調査地中で最も東側に位置している。西は国道309号線によってII調査区のF地区とは隔たっており、調査区は連続しない。一方、東端は里道を挟むものの、真福寺遺跡と連続している。

2. 地形環境

I 調査区は遺跡周辺の空中写真(写 I-1)を一見してもわかるように遺跡の南側に遺存している表層条里地割が複雑に入り組む開析谷によって乱れる部分に位置している。とくに黒山集落の南に所在する新池から派生する開析谷は非常に明瞭であり、蛇行しながら黒姫山古墳の東側を通り、北へとのびて

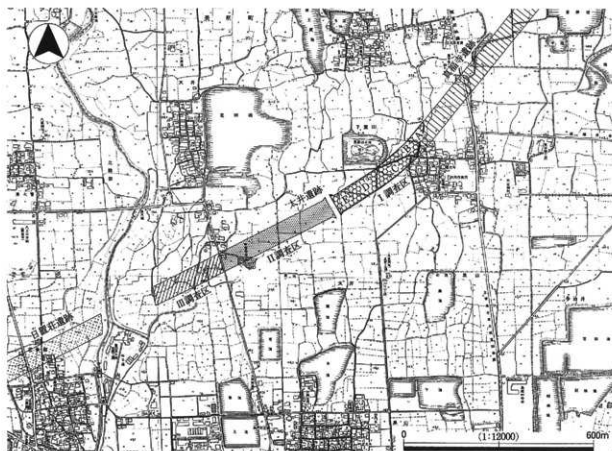


図 I-1 I 調査区の位置

いる。

なお、現地表面での標高は調査区南西端の最高所で約44m、北東端の最低所で約38mを測る。大局的にはおよそ1.5%の斜面地形を有していることになる。しかし、微視的にみた場合、西側のD・E地区は黒姫山古墳がのる台地状の高まりに該当し、C地区のほぼ中央から以東が真福寺遺跡と当遺跡を隔てる開析谷となる。

第2節 調査方法

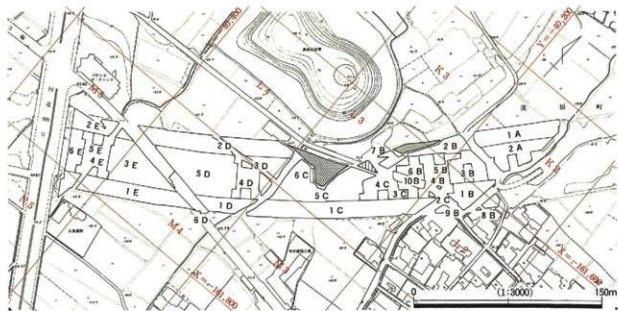
全体的な調査方法については前章までに記述してきた通りである。ここではI調査区におけるトレンチの設定および調査の経過について記しておく。

1. トレンチの設定 (図I-2)

調査区の延長が約400m、幅60mと長大であることから、調査予定地を分断する既存の道路および農業用水路を境として5分割し、東から順にA・B・C・D・E地区とした。なお、各地区内のトレンチは調査の順序を示す数字を冠して表記を行っている。

調査区全体を通して外側の府道部分は1次調査として全面発掘を行っているが、内側的高速道路部分の2次調査は大阪府教育委員会の立会での判断に基づいて、全面発掘もしくは橋脚部分のみの調査かを決定している。谷部分に該当しており、遺構密度が薄いB地区およびC地区東半部のトレンチが複雑な設定になっているのは、上記の理由に起因している。

なお、B地区およびC地区の北側の水田は一部が「史跡黒姫山古墳周庭帯外史跡指定地」に該当していることから、1986年度の(財)大阪文化財センターの発掘調査では調査対象から除外している。この部分は、大阪府・日本道路公団大阪建設局・大阪府教育委員会文化財保護課・美原町教育委員会の協議を経て、1988年度に美原町教育委員会が主体となって発掘調査を行っている。なお、美原町教育委員会が行った調査地はそれぞれ独立した3ヶ所であり、5Cトレンチの北側が「A区」、B地区とC地区を隔てる町道部分を「B区」、2Bトレンチの北側が「C区」と呼称されている。



図I-2 トレンチ配置図

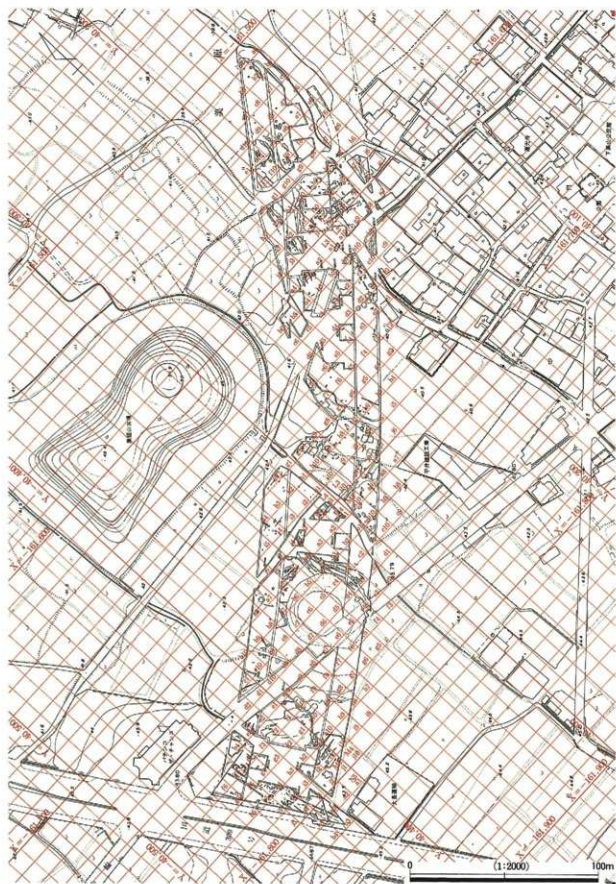


図 I - 3 地区割設定図

2. 調査の経過 (表 I-1)

1975 (昭和 50) 年、美原町を北東から南西方向に横切る都市計画道路松原・泉大津線の計画に伴う分布調査を行い、美原町域では丹上、真福寺、太井、余部の 4ヶ所で遺物の散布を確認している。

その後、計画が具体化した段階で、都市計画道路松原・泉大津線の施工者—大阪府南部特定事業建設事務所と近畿自動車道と歌山線の施工者—日本道路公団大阪建設局、それに当センターと大阪府教育委員会文化財保護課の四者は発掘調査に関する協議を重ね、当調査区は 1985 (昭和 60) 年 12 月 2 日に契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の大半は 1986 年度に実施しているが、8B～10B, 6C, 6D トレンチは 1988 年度に調査を実施している。各トレンチの発掘年度および担当者、既報告については以下の表の通りである。

表 I-1 I 調査区の調査一覧表

調査年度	トレンチ	調査担当者	概要報告書
1986 年度	1A～2A, 1B～7B, 1C～5C, 1D～5D, 1E～6E	杉本二郎・山上 弘・市本芳三・石神幸子	『太井遺跡 (その 1) 調査の概要』1987
1988 年度	8B～10B, 6C	国乗和雄	『太井遺跡 (その 4 ほか)・日置荘遺跡 (その 1-2) 調査概要』1990
1988 年度	6D	市本芳三	同 上

3. 調査の方法 (図 I-2, 3)

全体を通しての調査方法については前章までに記してきた。ここではとくに当調査区に関係する事項のみを記しておく。発掘調査は、まず現代の水田作土層および盛土層をバックホーによって除去し、水田作土層や谷部の堆積層および遺構は人力掘削を行っている。個々の遺構については臨機に実測を行っているが、最終遺構面の測量はヘリコプターを用いた写真測量により 20 分の 1 の図を作製している。

当調査区の地区割りは国土座標に基づいて行っており、100m 4 方の第Ⅲ区画をトレンチ配置図 (図 I-2) に明示しているほか、10m 4 方の第Ⅳ区画についても調査区にかかる部分については煩雑ではあるが明記している (図 I-3)。遺構の地区表示では、この国土座標による平面的な地区割りをを用いており、遺物の取り上げに際しては、上記の地区割りとともに後述する基本層序に基づいた層位表記によって基本的に 10m 4 方のグリッドを最小単位としている。

なお、大阪府教育委員会の指導を得て、保存が必要とされた遺構部分は厚さ 20 cm の海砂を用いて覆い、保存処置を行っている。また、当調査区で検出されたさば山古墳については、協議の結果、橋脚をずらすなどの保存のための処置がとられている。

第 3 節 調査成果の概要

1. 基本層序 (図 I-4・5)

当遺跡は基本的に洪積世の中位段丘上に立地しており、一部では現代の作土および心土 (床土) を除去した段階で地山が露頭する部分も少なくない。したがって、遺跡全体を通しての鍵層となるような堆積土層を見いだすことはできない。しかも、当調査区はその東側に大きな開折谷が南北に横断しており、現地表面においても約 4 m の比高差を有している。

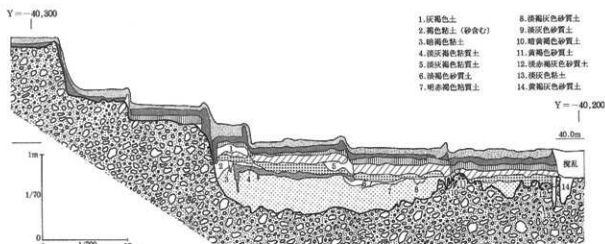
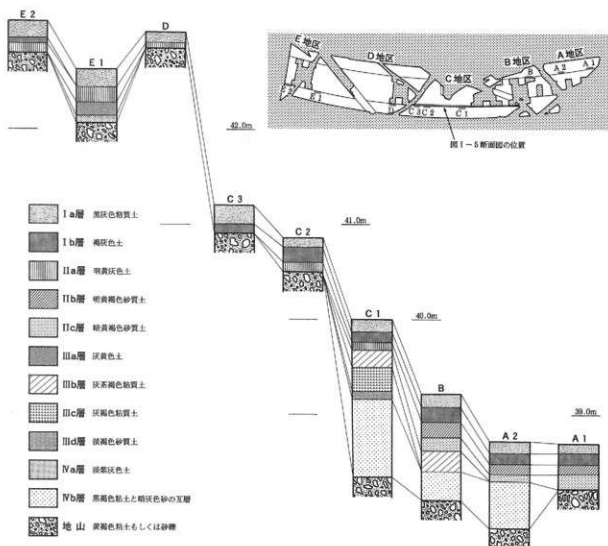
なお、当該調査区はこれまでに記してきたように複雑にトレンチが設定されており、トレンチの長軸方向の連続する土層断面図を作製することが困難であった。したがって、ここでは土層柱状図(図I-4)およびC地区各部の土層断面図(図I-5)を提示するのみにとどめる。なお、基本層序については各調査区によって様相を異にしており、したがって以下に示す層序は基本的にI調査区のみに通称するものと認識されたい。

当該調査区における堆積層は大局的にみれば、時期的に4層に大別が可能であり、上層からI層、II層という名称を与え、それぞれを土質等によって細別している。基本的に層序は、I層—現代、II層—近世・近代、III層—中世、IV層—古代である。

以下、調査区全体を通しての基本層序の記述を行う。

- I a 層 黒灰色を呈する粘質土で現代まで継続していた水田面の作土層である。層厚は10～20cmであり、調査区全面にわたって観察される。遺物はほとんど出土していない。
- I b 層 褐灰色を呈するシルト層で、近現代水田に伴う床土(心土)層である。層厚は平均して約10cm。I a 層と同様に調査区全面にわたって観察される。遺物はほとんど出土していない。
- II a 層 明黄灰色を呈するシルト層で近世の水田作土層と考えられる。層厚は平均して約10cm。C地区以西E地区までI層直下に堆積し、近世の遺物を包含している。
- II b 層 明黄褐色を呈する砂質土で近世の水田作土層と考えられる。A地区およびB地区でのみ観察される。近世の遺物を包含している。
- II c 層 暗黄褐色を呈する砂質土で近世の水田作土層と考えられる。A地区およびB地区でのみ観察される。近世の遺物を包含している。
- III a 層 灰黄色を呈するシルト層である。2DトレンチおよびE地区の浅い開析谷にのみ観察される。中世後期の遺物を包含している。
- III b 層 灰茶褐色を呈する粘質土であり、B地区からC地区にかけての深い開析谷で観察され、中世の土器を包含している。層厚約30cmを測り、上面は15世紀代の遺構群が形成される基盤層となっている。なお、C地区においては、調査前に見られた水田の畦畔および段差とほぼ一致しており、遅くとも15世紀代には人為的に整地されて耕作地として利用されていた可能性が高い。
- III c 層 灰褐色を呈する粘質土であり、C地区のみで観察される。層厚約30cmを測り、上層のIII b 層と同様の堆積状況を示している。当該層も自然堆積層ではなく、谷部の初現的な整地土であると考えられるものである。なお、同層には中世の遺物を包含している。
- IV a 層 淡茶灰色を呈するシルトである。2DトレンチおよびE地区の浅い開析谷にのみ観察される層であり、地山直上に堆積する。層厚は約20cmを測り、奈良時代以前の遺物を包含している。
- IV b 層 黒褐色粘土層と灰色砂層の互層であり、A地区からC地区にかけての開析谷の深い部分にのみ観察され、地山直上に堆積する。層厚はA地区で約50cmを測り、B地区の西側からC地区にかけては1m前後を測る。上層に堆積する黒褐色粘土層は遺物を全く包含せず、その直下の灰色砂層では保存状態の良い古墳時代の土師器・須恵器が少量出土している。ただし、当該層は基本的に奈良時代までの遺物を包含する。当該層は開析谷の最初の堆積層であり、最下層付近からは旧石器等が出土するものの、最終的な開析谷の埋没は奈良時代である。したがって、西側に所在する黒塚山古墳およびさば山古墳が造営された古墳時代には、そのすぐ東側に比高

差5m以上を測る深い開析谷が存在していたことになる。なお、当該層の上面からは鉾津が多量に廃棄された溝B-32などの平安時代以降の遺構群が検出されている。



2. 遺構・遺物の概要

当調査区では、古墳時代から近世にかけての遺構を一部では層位的に検出し、谷部の堆積層中からは遺構は伴わないものの旧石器時代の有舌尖頭器、弥生時代の石畿・土器底部が出土している。以下、時代順に概略を記しておくことにしたい。

(1) 古墳時代

D・E地区においてさば山古墳を検出している。さば山古墳は全長34m、周溝幅約7mを測る帆立貝式古墳である。墳丘は後世に大きく削平を受けており、埋葬施設は痕跡すら残存していない。周溝内からは墳丘から転落流出した葺石および埴輪が出土している。埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪のみで形象埴輪は出土していない。埴輪はいずれも小型であり、僅かではあるが須恵器が出土しており、6世紀前半代の年代を示している。

なお、さば山古墳は、今回の調査着手段階においてはまったく遺存していなかったが、明治41年の仮製地図にはその一部が残存しており、昭和24年に破壊されている。また、『河内黒姫山古墳の研究』（大阪府教育委員会 昭和28年）では、さば山古墳は「昭和廿四年に破壊され、須恵器の残片を出すとともに小形の圓筒埴輪が現れた。しかもその配列が直線かつ古墳の隅で直角にまがっていくので明に方形墳であることが知られた。」と記されている。今回の調査によってさば山古墳は帆立貝式古墳であることが明らかとなり、先の記述は道路で破壊された前方部の状況を示すものといえる。

(2) 古代

D・E地区において飛鳥時代と考えられる遺構群を検出している。E地区では開析谷に流れ込む溝のほか、輻と考えられる平行する細長い溝群を検出している。また、この他にD地区のさば山古墳の東側からは南北方向の溝群を多数検出しており、そのうちの溝D-14からは土師器の杯・甕などが出土している。いずれもさば山古墳の周溝を避けるように掘削されており、周溝が完全に埋没する以前のものと考えられる。奈良時代には基本層序の項でも触れたように開析谷の埋没が進み、その上面からは平安時代の遺構が検出されている。平安時代では溝等の遺構が検出されており、とくにA・B地区で検出した溝B-32からは多量の鈺滓および炭とともに複数の延喜通宝が出土している。

(3) 中世

中世では2時期にわたる遺構群を検出している。

古い段階の遺構群としては、5C・3Dトレンチにかけて、12世紀から13世紀における掘立柱建物跡、土坑を検出している。土坑からは瓦器碗等が出土している。

新しい段階の遺構としては1C・5Cトレンチから14世紀末葉から15世紀前葉にかけて存続した土坑・井戸・溝等を検出している。遺構は南東部と北西部に集中しており、中央に空間を有している。なお、今回の発掘区においては当時期の建物跡は検出していない。遺物は日常雑器である瓦質の羽釜・甕・鉢・瓦が多量に出土しており、他に青磁碗、白磁皿、常滑甕・壺、瀬戸鉄釉瓶子・香炉、南方系壺、漆器碗等、多様な遺物が出土している。とくに瀬戸鉄釉瓶子は3遺構内から個別に出土した破片が接合したもので、大阪府下での出土は希有である。

(4) 近世

ほぼ全域から耕作に伴う犁溝等を検出している。これ以外では1B・3Bトレンチにおいて井戸、土坑、溝等の遺構を検出しているが、これも農耕に関わる遺構群であると考えられるものである。

第2章 弥生時代以前の遺構・遺物

当調査区においては弥生時代以前の遺構は全く検出されず、I層～III層を中心とした中近世の層位からわずかに石器や土器等が出土したのみである。

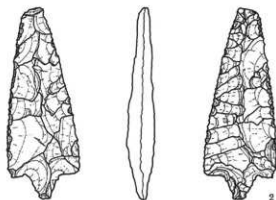
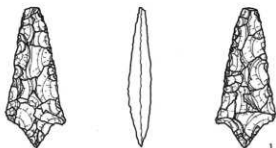
なお、当該期の遺物は僅少ではあるが、有舌尖頭器をはじめとする旧石器時代の石器のほか、縄紋時代の石鏃、弥生時代の石鏃と土器が出土している。

そのほか、谷部の推積層を中心として不定型刃器などが出土しているが(写I-26)、以下では特徴的な遺物を中心に報告しておくことにしたい。

第1節 旧石器時代の遺物

1. 石器 (図I-6-1~3, 写I-25-1,2,3)

当調査区から出土した旧石器時代の遺物には、有舌尖頭器が3点ある。(1・2)はE地区の近世水田作土層であるII層から出土したものである。(3)はA地区において検出した谷部の最下部に堆積するIVb層(暗灰色砂層)から出土したものであり、比較的原位置に近い状況を保っている可能性がある。石材はサヌカイト製で、表面は風化が著しい。

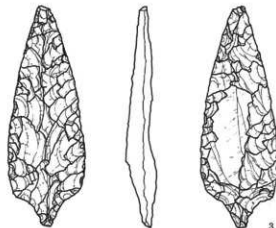


第2節 縄紋時代の遺物

1. 石器 (写I-25-4)

縄紋時代の石器は、石鏃等である。

写真に掲げた石鏃は1Aトレンチ調査時の排土中からの表採であり、厳密な層位は不明である。サヌカイト製の無茎石鏃であるが、一部欠損している。



第3節 弥生時代の遺物

1. 石器 (写I-25-5,6)

写真に掲げた2点の石鏃はいずれもサヌカイト製の有茎石鏃である。(5)はD地区のI層から出土したものであり、先端部を若干欠損する以外は完存する。(6)はE地区のII層から出土したものであり、茎部の先端を欠損する。

2. 土器

図、写真ともに掲載していないが、谷A-1の埋土中からは後期の変形土器の底部が出土している。



図I-6 出土石器

第3章 古墳時代の遺構・遺物

当調査区における古墳時代の遺構はD・E地区において検出した「さば山古墳」のみである。そのほか、A～C地区において検出した谷からは古墳時代の遺物が出土しているが、これについては奈良時代まで下る時期の遺物も出土しており、その初現は明らかに古墳時代以前に遡るが、埋没年代については古代に下ることが明らかとなっている。したがって、この谷については次章以下で記述をすることにした。

第1節 D・E地区の遺構と遺物

1. 古墳

(1) さば山古墳 (図I-7～9、写I-5～8・9-3)

D地区からE地区にかけて古墳を1基検出している。この古墳は黒姫山古墳の周辺に近年までその存在が確認されていた6基の古墳のうちの1基である「さば山古墳」に比定される古墳である。

A. 立地

黒姫山古墳およびさば山古墳周辺の地形は図I-7に示したように東西両側に開析谷が入り込んでおり、結果的に台地上の丘陵が北へ向かって三叉状に派生している。そのうちの中央の台地状に黒姫山古



図I-7 黒姫山古墳周辺の古墳と地形

墳が造営されており、さば山古墳はこの同一台地上の南側に造営されている。

また、既に破壊されているために詳細は明らかではないが、さば山古墳の東側に所在していた名称不明の古墳および黒姫山古墳の北側に存在していた鎮守山古墳およびどん山古墳についても基本的に同一台地上の東辺部付近に造営されていた状況が看取される。その他、黒姫山古墳の西側には、けんけん山古墳およびさる山古墳と称される古墳が存在していたが、これについては浅い開析谷を挟んだ西側の台地の東辺部に造営されており、この台地上からはⅡ調査区で小型方墳群が検出されている。

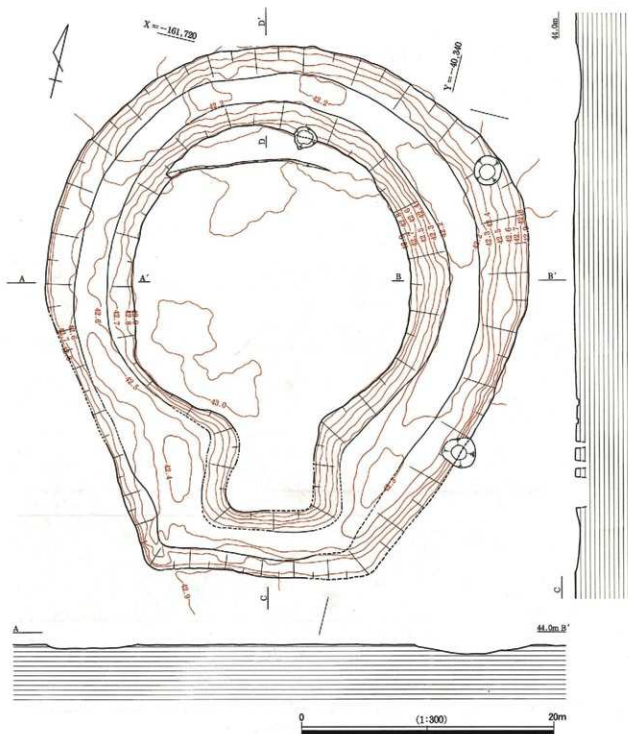


図 I - 8 さば山古墳

B. 墳丘 (図 I-8)

馬蹄形周溝を有する帆立貝式前方後円墳である。規模はいずれも基底部からの計測で、墳丘は全長34m、後円部の直径は27mを測り、前方部は長さ9m、幅11mを測る。前方部は後世の攪乱が著しいが復元される形状は、ほぼ方形を呈しており、このことは黒姫山古墳の報告書中の“円筒埴輪列の配列が直線であつ古墳の隅で直角に曲がっていく”との記載と合致している。

なお、墳丘盛土は完全に削平されており、地山面を掘り込んだ周溝がかろうじて遺存していたのみである。したがって、墳丘の残存高は周溝が最も深い東側では周溝底から約0.7m、浅い西側では約0.3mを測るのみである。

当該古墳は前方部を南方に向け、主軸を南北方向にとるが、西方に約10°振れている。さば山古墳の位置するところは、地理的にみると、黒姫山古墳の両側に走る開折谷に挟まれた丘陵上に立地していることがわかる。墳丘部分は削平を受けており、耕作土を取り除くと明黄褐色を呈する地山面が検出される状態であり、主体部は残存していなかった。また、後円部の平面形態はややいびつな円形を呈している。

C. 周溝 (図 I-9)

周溝は馬蹄形を呈するものであり、全長は42m、後円部側の直径は38m、前方部側の直線部分の長さは17mを測る。周溝幅は後円部側で6~9m、前方部で5mを測る。周溝の深さは北側が約0.75mで深く、西側が約0.30mで浅い。周溝内の堆積は最下層の一部を除いて基本的には人為的な堆積層であり、灰色系の粘質土で埋没している。埋土中からは墳丘上から転落した葺石と円筒埴輪が出土しているが、その中には中世の瓦器・瓦も含まれており、最終的な埋没は中世に行われた整地によるものであると考えられる。

なお、墳丘部分と同様に外堤については完全に削平されており、その存否さえ明らかではないが、周溝の東側で検出された溝D-16は周溝の外側を幅約4mの間隔を保って掘削されており、この溝が掘削された段階においては外堤が残っていた可能性も高い。

D. 遺物の出土状況 (図 I-10)

周溝内からは転落した葺石と埴輪が後円部の北側周溝を中心に比較的多く出土している。出土状況の平面的分布については図 I-10に示した通りであり、葺石は基本的に墳丘側の基底部に沿って出土している

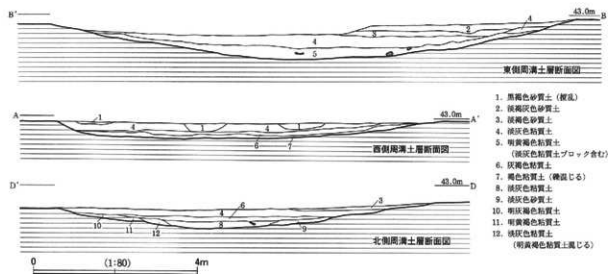


図 I-9 さば山古墳周溝土層断面

状況を看取できる。また、埴輪についてもほぼ同様の分布状況を示しているが、一部の埴輪は外堤側の基底部近くから出土しており、一部の埴輪には外堤から流入したのも含まれていた可能性がある。ただし、これらの遺物の大半は溝底からはやや浮いた状態で出土しており、さらに後世の整地土と考えられる堆積層とともに周溝内に流出したものと考えられる。古墳時代の遺物としては葦石のほか、埴輪（円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪）が主として出土しており、わずかであるが、須恵器の杯身・壺が出土している。また、これらに混じて整地段階において流入した遺物として中世の瓦器・瓦等が出土しており、周溝の最終埋没の時期を知ることができる。

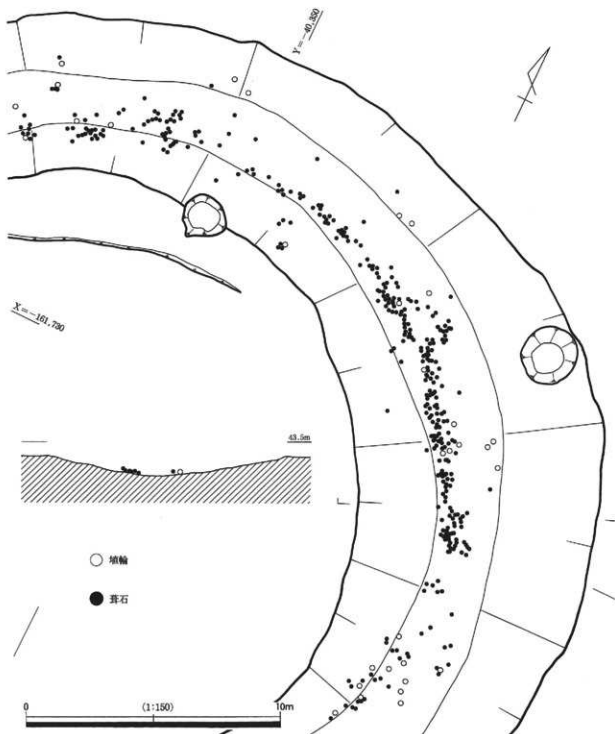


図 I -10 さば山古墳周溝内埴輪・葦石出土状況

E. 出土遺物 (図 I-11 ~ 16)

さば山古墳の状況については前項でも記してきたように、墳丘は古代以降、中世を前後する時期に大きく削平されており、遺物の大半が周溝内からの出土である。

周溝内からは墳丘上から転落した葺石とともに比較的多くの埴輪が出土している。なお、この埴輪については葺石とともにその大半が墳丘寄りから出土しており、その多くが墳丘上から転落したものであることを物語っている。

なお、周溝内からは古墳時代の須恵器杯身や壺も出土しているが、それ以外に墳丘が削平された段階に混入したと考えられる中世の瓦器・瓦が出土している。

以下、出土数の多い埴輪を中心に記述を進めることにしたい。

埴輪

埴輪は、主に周溝からおよそ30コンテナ分出土しており、広範囲に接合するものがあることから、本来の位置を保っているものは無く、中世の削平時に周溝に転落したものと考えられる。なお、上層の包含層からも多量に埴輪が出土している。埴輪は、朝顔形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪が出土しており、そのほとんどが円筒埴輪であり、他は数える程である。

a 朝顔形埴輪 (図 I-12、写 I-27-1,2)

朝顔形埴輪は口縁部破片が3点出土しており、そのうち(図 I-12)に示す2点は、いずれも焼け歪みの大きなものである。(1)は口径41.6cmを測り、括れ部の凸帯を欠損する。外面はタテハケの一次調整のみで、内面の口縁部がヨコハケ、体部が指ナデである。(2)は、外反してさらに屈曲して外方に伸びる口縁部の端部が凹面をもち半球状の肩部をなす。口径55.2cmを測りやや大型である。口縁部の外面はタテハケを施し、体部外面にタテハケ後ヨコハケを施す。口縁部内面は端部にヨコハケを施し以下、タテハケおよびナメハケを施す。体部内面は横方向の指ナデを施し、粘土紐の接合痕を残す。括れ部の凸帯は、断面三角形である。肩部にヘラによる3条の弧紋が描かれる。いずれも、橙褐色をした須恵質のものである。

b 円筒埴輪 (図 I-13 ~ 16、写 I-27-3 ~ 6,29)

円筒埴輪は、口径22cm ~ 29cm、器高40cm前後のもので、凸帯を3本ないしは4本有するもので、口径が底径の約1.5倍のラッパ形のものである。口縁端部の平面形が楕円形になるものが多く、口縁部が1/2以上残存していないものは、口径が不確かである。口縁部の遺存するもので410個体あり、底部が遺存しているものが212個体ある。その他、凸帯が2本以上残っているものが8個体ある。ほとんどのものが茶褐色をした須恵質のものであり、わずかに生焼けの土師質のものがある。口縁部端部は、面をなすものと凹面をなすものがあり、凸帯の形状に断面台形のものやM字形のものがある。調整に若干の差異が認められ、以下ようになる。

まず、その一は(図 I-13)のように、外面にタテハケの一次調整のみを用い、内面ハケメを用いるもので、そのハケメは口縁部にヨコハケないしはナメハケを施すものとタテハケを施すものがある。体部下半には、指ナデを施すものが多い。

その二は(図 I-14・15-6,7)のように、外面に一次調整のタテハケ

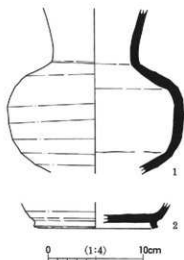


図 I-11 さば山古墳
周溝内出土須恵器

のみを用い、内面に指ナデを施す一群がある。この一群には、最上段に2.5cm程の円孔を1ヵ所に穿つものがある(図I-14-4.6)。

その三は、(図I-15-1~4)のように、外面にタテハケ後A種ヨコハケ、内面の口縁部にヨコハケを施すものと、指ナデのものがある。外面の最下段に一次調整のタテハケのみを施すものと、板状ナデおよび指ナデを施すものがある。

その四は(図I-15-8.9)のように外面にタテハケ後縦方向の板状ナデを施すものがある。

c 形象埴輪(写I-30)

出土した形象埴輪は写真I-30に掲げている。しかしながら、いずれも小片であり、全容を知りうるものはない。

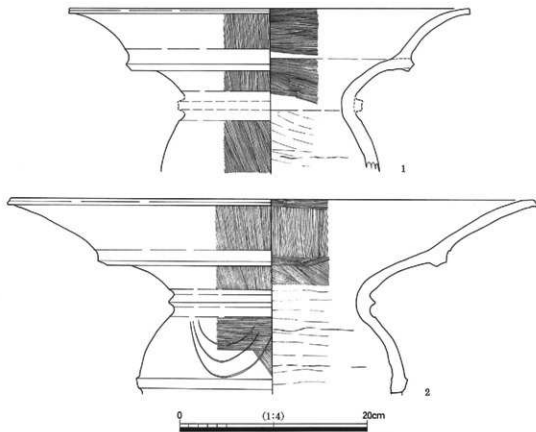
(1)および(4)は筒状を呈する埴輪であり、(2,3,5,6)は表面に線刻が残る埴輪片である。前者の全容は不明であるが、後者は蓋形埴輪であると考えられる。

d 須恵器(図I-11)

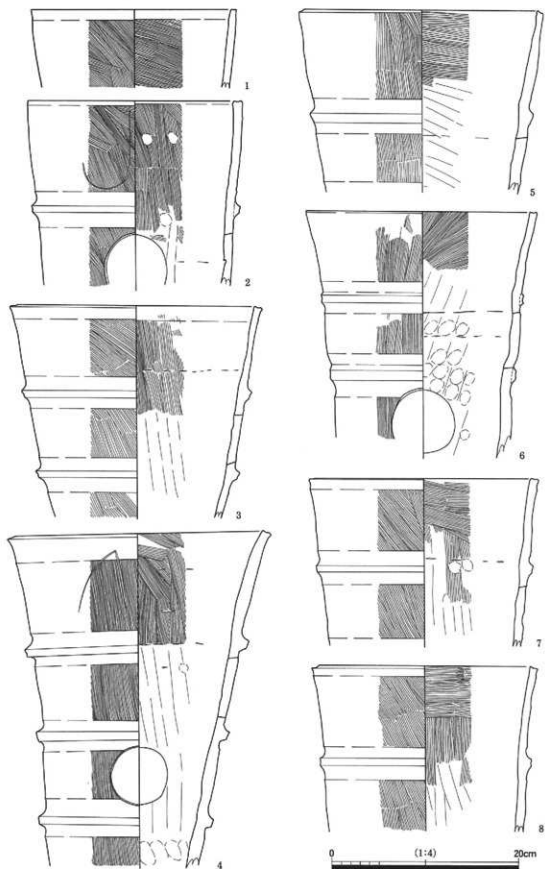
さば山古墳の周溝内からはわずかであるが、埴輪に混じって須恵器が出土している。そのうち、図化しえたのは図I-11に示した2点のみである。

(1)は直口壺であり、口縁部および底部ともに欠損している。外面の胴部下半をヘラ削りする以外はヨコナデ調整である。厳密な時期は特定できないが、円筒埴輪の示す年代とも大きな時期差はないものといえる。

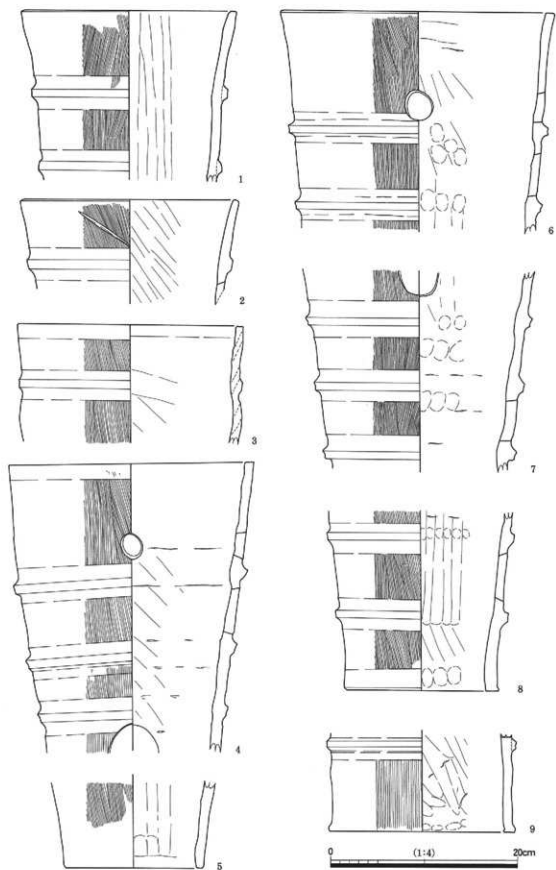
(2)は須恵器杯Bであるが、時期的にはさば山古墳とは直接関係しない奈良時代後半代を前後する時期のものと考えられる。さば山古墳削平の時期を知る上で重要な土器と考えて掲載している。



図I-12 さば山古墳周溝内出土朝顔形埴輪



図I-13 さば山古墳周溝内出土埴輪(1)



図I-14 さば山古墳周溝内出土埴輪(2)

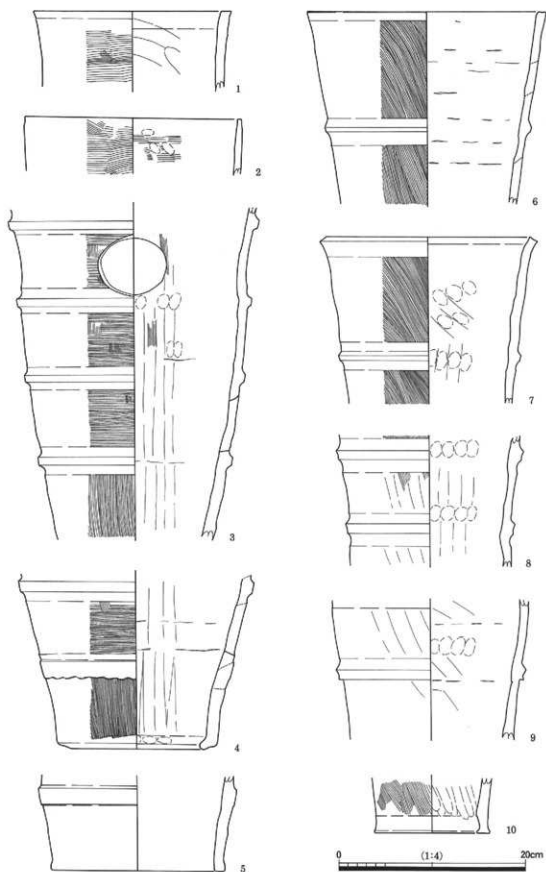
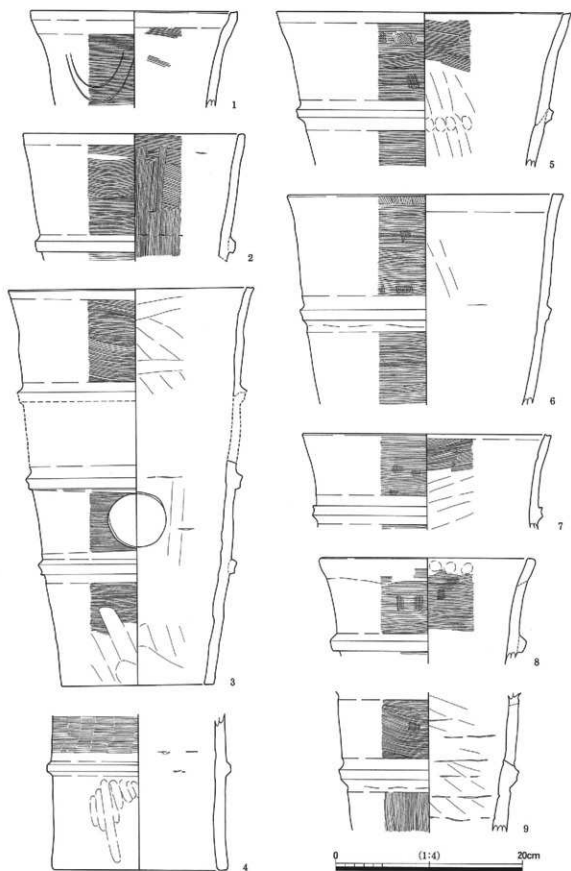


図 I -15 さば山古墳周溝内出土埴輪 (3)



図I -16 さば山古墳周溝内出土埴輪（4）

第4章 古代の遺構・遺物

当調査区における古代の遺構はその密度は濃いとはいえないものの、A地区からE地区にかけての各調査区から遺構を検出している。当該期の遺構からは7世紀～10世紀までの遺物が出土しているが、前述のように遺構がさほど多くないことから、ここでは各時期を細分することなく、大きく古代として地区ごとに報告を行っていくことにしたい。

第1節 A・B・C地区の遺構と遺物

1. 谷

(1) 谷A-1、谷B-1、谷C-1

A. 遺構の状況 (図I-17、写I-3)

A地区からC地区にかけて南北方向の開析谷を検出している。各地区名を冠した遺構名を付しているが、いずれも一連の開析谷である。この開析谷の幅は若干の前後はあるものの平均して120mを測り、段丘上からの比高差は最深部で約4mを測る。今回の調査ではこの開析谷の谷心線に沿ってさらに深く開析された谷状の流路 (図I-17に示した濃いトーンの部分) を検出している。この流路は幅が35～40mを測り、南側がやや狭く、北側にむかって広がる傾向が看取される。深さは約1.5mである。底面は緩やかに北に向かって傾斜している。ちなみにC地区における流路底面のレベルは38.3mである。

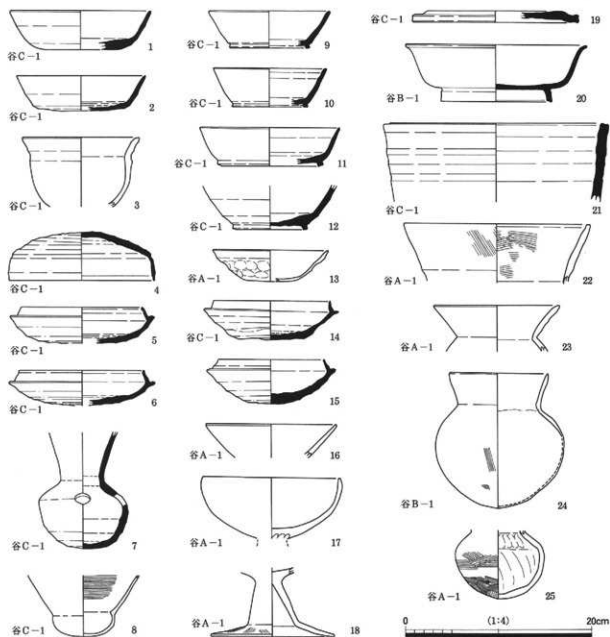


図I-17 検出した谷 (谷A-1,B-1,C-1) と周辺の地形

流路内の最下層には青灰色シルトおよび植物遺体を多量に包含する暗灰褐色粘質土が堆積しており、その上部に最大1 mを測るIVb層が堆積している。IVb層は基本的に灰色砂層であり、流水堆積の状況を示している。なお、この砂層中には黒褐色粘土が互層状に堆積し、埋没過程において滞水する時期があったことを示している。また、このIVb層は上位では灰色～黄灰色細砂ないしはシルトとなり、最上層はほぼ全面にわたって黒褐色粘土が堆積している。

出土遺物の大半は砂層中に含まれており、ここからは古墳時代の土師器や須恵器が完形に近い状態で出土している。しかしながら、この砂層中からは7世紀代の須恵器や土師器等が出土しており、さらにその上層の最終的な谷の堆積層からは7～9世紀代の土器が出土している。

したがって、流路を含む谷部は少なくとも古墳時代以前には存在しており、最終的に埋没したのは9世紀頃であると判断される。



図I-18 谷(谷A-1,B-1,C-1)出土土器

B. 出土遺物(図I-18、写I-31-1)

谷から出土した土器は、古代の遺物と古墳時代の遺物に大別できる。以下、個別に報告することにした。

a 古代

古代の土器は7世紀代から9世紀代の時期幅を有しており、土師器と須恵器が出土しており、とくに谷C-1からの出土品が多い。

(1・2)は須恵器杯A、(9~11)は須恵器杯Bであり、いずれも8世紀前半代を前後する時期のものと考えられる。(12)は須恵器壺の胴部下半部であり、他の須恵器と同様に7~8世紀代のもと考えられる。(19)は須恵器杯蓋であり、つまみ部分は遺存していない。扁平である点などから8世紀代のもと考えられる。

(20)は谷B-1から出土した金属器模倣の須恵器杯であり、器表面は丁寧なナデ調整によって仕上げられている。

(13)は土師器杯Cであり、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。時期的には10世紀頃、平安時代の所産である。

b 古墳時代

古墳時代の出土土器には土師器と須恵器があり、時期的にもやや幅をもっている。

(4~6)は谷C-1から出土した須恵器蓋杯であり、TK10~43型式前後する時期のものである。(14・15)も同じく谷C-1から出土した須恵器杯身であるが、口径がやや小径であることなどからやや新しい7世紀前半代のもと考えられる。(7)は谷C-1から出土した須恵器甕である。

(8)は谷C-1から出土した土師器小型丸底壺である。口縁部は大きく外上方に開くものであるが、先端部分を欠損している。口縁部内面には横方向の丁寧なヘラミガキが残る。古墳時代前期に遡る土器である。(16~18)は各A-1から出土した土師器高杯である。(22~25)は土師器の壺および甕であり、

(24)が谷B-1から出土している以外はいずれも谷A-1から出土している。

2. 溝

(1) 溝A-6(図I-19、写I-9-1)

溝A-6は1Aトレンチから2Aトレンチにかけて検出したものである。当該溝の北側は全体に幅が広く、浅くなっており不明瞭である。また南側は未調査部分を挟んではいないものの、3Bトレンチにおいて検出した溝B-32に繋がるものと考えられる。

この溝は大局的には南北方向をむいているが、これは地形に制約されたものであり、等高線に沿うかたちで掘削が行われた結果であると判断される。また、当該溝が全体に蛇行しているのも地形の影響を受けたものである。

幅は1.50m~2.50m、深さ0.28mを測る。溝底面のレベルは2Aトレンチの南端部で38.124m、一方の1Aトレンチの北端部では37.722mを測り、南から北に向かって緩やかに傾斜している。断面形状は浅いU字形を呈しており、下層には砂層が堆積し、水を流すことを意図して掘削された水路である可能性が高い。

ただし、砂層の上層には炭化物を多量に含む淡黄褐色粘質土が堆積しており、下層での流水堆積とは異なり、最終的には滞水状態で埋没したものと判断される。

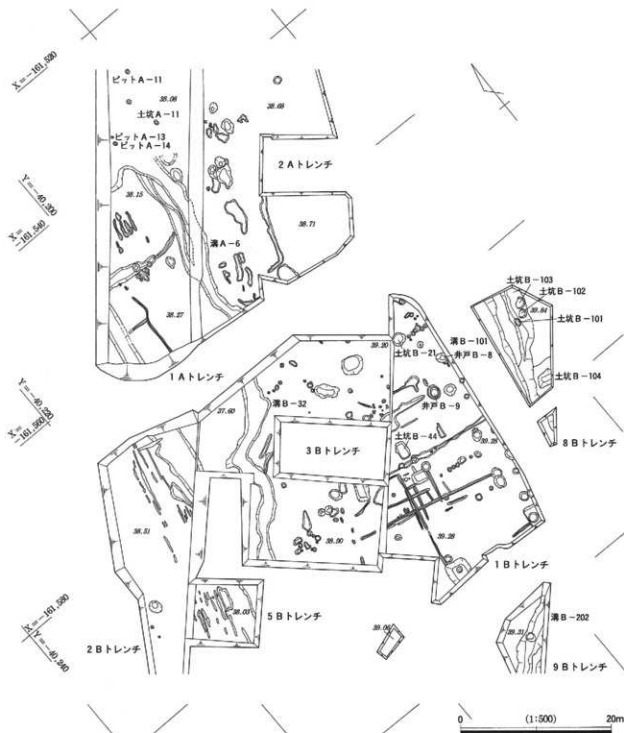
土師器、黒色土器等が若干出土しているが、図化するものはない。

(2) 溝B-32

A. 遺構の状況 (図I-19・20, 写I-10・11-1)

溝B-32は3Bトレンチで検出したものであり、冒頭でも記したようにA地区の溝A-6に継続するものである。当該溝はA地区での状況と若干異なり、著しく蛇行している上に幅も一定していない。

幅は1.50m~3.00m、深さ0.30mを測る。埋土の状況は溝A-6とほぼ同様であり、下層に砂層が堆積しており、一時的に水が流れていた状況を示している。溝底のレベルは南端部で38.082m、北端部で



図I-19 A地区西半部・B地区東半部遺構平面図